



TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION  
東京フルブライト・アソシエーション

# NEWSLETTER

No.22  
December  
2009



総会



第34回日米交流チャリティ・ゴルフ大会



CONTENTS

ページ

表紙	ジョン V. ルース駐日アメリカ大使	
前グラビア	総会とチャリティー・ゴルフ大会	
ルース大使からのメッセージ		2
カロライン・又野・ヤンさんからの叙勲御礼		3
同窓会メンバーから	江端貴子 文野千年男 古谷善平 比嘉幹郎 我謝京子	4
2009年度総会報告	①講演会 原文人 ②長坂健二郎会長挨拶 ③決算・会務報告	8
アンケート特集	若手フルブライター体験者は何を考えているか?	12
三上基金と三上フォーラムについての報告	大野 熙	16
2009年度財団奨学生冠名リスト		19
ガリオア・フルブライト同窓会の活動	中部同窓会 四国同窓会	20
第34回日米交流チャリティー・ゴルフ大会	外池滋生	22
2009年度アメリカン・ニューグランティー歓迎会		23
鎌倉歴史散策ツアー	松尾秀助	24
国会・最高裁見学ツアー	島田道子	26
宇都宮・日光ツアー	山田真之	26
セミナー報告	定森大治 中尾武彦 千野境子 泉 宏	28
東京フルブライト・アソシエーション沿革とホストファミリー		31
世界フルブライト・アソシエーション第32回年次総会 (ワシントン DC)	大野 熙 福田 学	32
掲示板	藪根正巳 今井章子 佐久間徹 米原あき	34
事務局から	新しいサロンへの招待	36
後グラビア	アメリカン・ニュー・グランティー歓迎会	

Photo: Hirokazu Takayama



## ルース大使からのメッセージ



AMBASSADOR OF  
THE UNITED STATES OF AMERICA  
TOKYO


**Message**  
**Fulbright Alumni Association Newsletter**  
**October 26, 2009**

It is my pleasure to congratulate you on being alumni of the Fulbright scholarship program, the premier exchange program of the U.S. Government.

Until I arrived in Japan, I had no idea that one of the titles I would assume as Ambassador was that of honorary chair of the bi-national Fulbright Commission. This is a position I accept with enthusiasm, because as each of you has no doubt personally witnessed, the results the Fulbright experience produces in terms of building relationships and fostering mutual understanding are without peer. For over 50 years, the Japan-U.S. Fulbright Program has helped men and women prepare for careers, enriched the lives of thousands of individual participants, and played an indispensable role in linking our societies and nations together in partnership.

Nowhere in the world has that bilateral Fulbright effort been more successful than in Japan, where a nationwide network of Fulbright alumni associations play a crucial role in keeping the Fulbright experience alive by encouraging interactions with other alumni, new program participants, and the U.S. government. I commend you on the successful completion of the Annual Fulbright Alumni Charity Golf Tournament and your annual fundraising efforts that provide important financial resources to the Japan-U.S. Educational Commission as it expands the Fulbright experience to the next generation of global leaders. I encourage you to engage with this new generation of Fulbright alumni through your traditional alumni activities, as well as through new technologies such as the *State Alumni* online community, to ensure that the U.S.-Japan relationship continues to strengthen in the future.

You have my deep gratitude for your important contributions to the Fulbright Program as a member of the esteemed Fulbright alumni community.

  
John V. Roos  
Ambassador

## カロライン・又野・ヤンさん叙勲

われらが親愛なるヤンさんが、平成21年の「秋の叙勲」で旭日中綬章を受章されました。ヤンさんからのメッセージがとどきました。

私が、この秋の叙勲で旭日中綬章をいただけたのは、フルブライト同窓生の皆様のお陰です。1982年（フルブライト・プログラム30周年）から同窓会を設立し、全国の同窓生による募金活動がはじまりました。その活動の一つとして始めた、フルブライト・チャリティーゴルフ大会も、この年から数えて今年が28年目になり、まだまだ続けられることでしょう。

また、1986年にはフルブライト記念財団も設立されましたが、この様な活動のお陰で日本のフルブライト・プログラムが発展してきましたが、これは同窓生の皆さんのご協力、そして今は亡き山内大介さん、小山八郎さんとそれに川村茂邦さんのリーダーシップがなければ、このような勲章はいただけなかったと心から思っています。

皆さん、本当にありがとうございました。そして、これからもフルブライト・プログラムの発展にご協力下さい！



Caroline A. Matano-Yang

ハワイ・オアフ島生まれ。Smith College 卒業。Michigan State U. Educational Administration の修士。1972年5月から1994年3月まで22年間にわたって日米教育委員会事務局長をつとめ、フルブライト・プログラムの「顔」として内外の関係者に親しまれた。

# 同窓会メンバーから

## 政治が変わった夜



江端 貴子  
1990 M.I.T.

衆議院議員、民主党。  
外資系企業取締役、東京大学  
准教授などを歴任。今年の総  
選挙で東京都第10区から立候  
補、見事、初当選を果たした。

8月29日土曜日夜7時半、池袋西口公園前につけた街宣車に登った私は、息を飲んだ。

西口公園の噴水を丸く残して、公園も、バス停を隔てた通りも、そのまた向こうの通りも、人で埋め尽くされ、またその方たちが、首から上しか見えないほど、立錐の余地もない状態でこちらを見上げている。第45回衆議院議員総選挙の最終日に民主党の鳩山代表の最終演説を聞こうと集まったおよそ1万人の方たちであった。池袋東口で麻生総理、西口で鳩山代表という最高のお膳立てで、私の最終演説を行う。これは新人にとって、本当にかげがえのない人生で最初にして最後の晴れ舞台であった。まさに革命前夜とでもいうような、熱いうねりを受け止めさせていただいた。

このように盛り上がった選挙であったが、最初から順調だったわけではない。私が最初に政治家を目指したきっかけは親の介護であった。当時母親の援助も受けながら、子育てと仕事を両立させていた私は、突然頼りにしていた母親が今度は介護が必要になるという状況に直面した。介護事業所に相談したところ、私が同居しているために、生活支援、つまり買い物や炊事、洗濯、掃除などの援助は受けられないという。私は働いていて、昼間はいないのですがと言っても、同居人が働いているか否かは関係ないとのこと。男女共同参画や女性の社会進出を進める中、ずいぶん後ろ向きの制度だと感じたが、ちょうど学童保育が終わりになる息子のこともあり、当時外資系企業の日本法人の取締役であったが、職を

辞し、介護と子育てのために家庭に入ることになった。これからますます、非婚化、核家族化、少子化が進む中で、介護制度がこのような状態でいいのだろうか、もっと生活者の視点から制度を変えていきたい。その思いが政治家になる原動力となったのである。

その志のもと、円より子参議院議員が校長を務める「女性のための政治スクール」にて勉強をさせていただき、4年たって、2007年12月18日に東京都第10区の民主党公認候補として、当時の小沢代表と一緒に記者会見を開いた。小沢流選挙といえば、3万軒は歩け、1日50回は立立ちを行うようにと言われる。選挙区において、まさに地盤、看板、かばんのなかった私は、ポスター張りや立立ちに明け暮れた。立立ちは、1箇所5分ほど話し、また数百メートル離れたところで話し、を繰り返す。1時間で10箇所、6時間で60箇所、ほとんど人通りのない昼下がりの住宅街での立立ちは、本当に聞いている人がいるのだろうか、これが選挙に役立つのだろうかという不安だけが残った。

時々、雑誌や新聞が行う世論調査でも、まったく認知度や、支持率が上がってこない。少しめげそうになっていたある日、いつものように立立ちをしていたら、ちょうど目の前の家から、60歳くらいの男性が出てこられた。家にいたら、外で「介護」という言葉が聞こえたので、出てきたという。その方はお母様と二人暮らしで、8年前から会社を辞め、お母様の介護をされている。炊事、洗濯、家のことやお母様の身の回りのことをするためにずっとやってきた。しかし、もう限界です。この先何年続くかと思うとつらいと話されました。私はその話を伺って、ああ私の話でも聞いてくれている人がいる、この方のためにも、介護制度を何とかしなくてはいけないという大きな勇気をいただいたのである。

一方で、2008年の年明けにはとされていた解散は、次年度の予算が成立してから、洞爺湖サミット

が終わってから、北京オリンピックが終わってからと、どんどん先送りされ、一時は、日程まで報道された10月、11月の解散も100年に一度の金融危機という理由で、流れた。こうした中、地域の皆さんの政治を変えてほしい、私たちの生活を変えてほしいという思いは、むしろ大きくなっていったのである。2009年になって、定額給付金や補正予算の内容などで、皆さんの不満、不安は一気に高まった。迎えた7月の東京都議会議員選挙では、私の選挙区である豊島区で、民主党の都議会議員が4万5000票以上を獲得して、2位以下に2万票以上の差をつけてトップ当選し、もうひとつの行政区である練馬区では、定数6名のところ、3名の民主党の都議会議員が誕生するという快挙を成し遂げたのである。

8月30日の投開票日、当確が出るまで、支援者の方々をやりもきさせたが、東京都第10区で民主党初の小選挙区での議席をいただいた。しかし、これからは本当の意味での奮闘である。選挙において、大きな勢いをいただいたが、それは民主党に対する全幅の信頼ではない。まさにこれから、人を重視した、人を守り、人を育て、人を活かしていく制度づくり、予算配分をどう実現していくかが問われている。私が掲げている3本の柱の政策、1) 介護する人を助けます、2) 教育する人を育てます、3) 働く人を増やします、今までのムダな道路やハコモノや、必要のない公共事業を止めて、人にお金を投入していかない限り、実現は難しい。そしてその判断の根幹は、「生活が第一」ということである。まずは、生活の足元を固めて、お互いが支えあい、助け合う社会を築いていきたい。そのことが消費を促し、内需を高め、社会や国の活性につながると思うからである。

朝の5:30に起きて、息子のお弁当を作り、今も地下鉄で永田町に通う私にとって、日々の行動は、ほとんど変化がない。ありがたいことに、顔を覚えていただき、街角や電車内で、声をかけていただくことは多くなった。私にとって、皆さんとの意見交換、交流の場は、なくてはならないものである。地元の活動も行いながら、初心を忘れず、また生活実感を失わず、これからの大きな政治の変革に取り組んでいきたいと思う。

思えば、私のキャリアの挑戦は、フルブライターとして、米国に留学したことから始まった。今回の当選にあたっては、米国大使館より、私と米国の関

係をまさに作ったのはフルブライト奨学金制度であることを誇りに思っていたきたいという、温かいメッセージをいただいた。これからもフルブライトの一員として、志高く、がんばっていきたい。

## フルブライト留学と コロンビア大学

文野 千年男  
1968 Columbia U.

三井業際ヒューマンアセット株式会社 代表取締役社長

私は1968年9月からフルブライターとして約1年間、コロンビア大学（経済学大学院）へ留学させていただいた（1969年12月のMA）。留学の一環で直前の2カ月はデンバー郊外ボルダーの町に位置するコロラド大学キャンパス内にあったエコノミクス・インスティテュートで短期のトレーニングを受けた。その時は現フルブライト記念財団理事長（元50周年記念行事実行委員長）の賀来景英氏とシアトルに向かうノースウエスト航空から一緒に2カ月間寝食をともにした（同氏は直後にシカゴ大学へ留学）。

帰国後、フルブライト同窓会活動では40周年（1992年）、50周年（2002年）の記念行事のお手伝いをはじめ日常の活動にも積極的に参加させていただいてきた。50周年記念行事では私もスペシャルアクティビティーズサブコミティーのチェアとして参画、同行事の締めくくりとしてフルブライト留学生OB並びにその家族など総勢50名の参加を得て「REDISCOVERING AMERICA TOUR」を実施、フルブライト夫人にも参加いただいてボストン、ニューヨーク、ワシントンなどで交流行事が行われ、ニューヨークではコロンビア大学側にホスト役をお願いし有意義な行事が行われた。フルブライト氏の出身地であるアーカンソー州のファイアットヴィルを訪ね、同氏が38歳で学長を務めたアーカンソー大学や同氏ゆかりの記念碑・図書館・墓地まで訪ねる機会を得て同氏への感謝と同氏の偉業を偲ぶ大変有益な旅となった。

さて、わが母校コロンビア大学にはフルブライト留学制度発足以来これまでのべで319名（同窓会事務局調べ、帰国ベース）が留学している。因みに最初のフルブライターとしてコロンビア大学に留学された市村真一氏（元京都大学経済学部教授）は経済学大学院に留学されていた。現在フルブライト同窓会会長の長坂健二郎氏も1962年のコロンビア大学

留学生である。

日本からのフルブライト留学生総数は現在6904名であり、319名のコロンビア大学への留学生の比率は全体の5%弱、フルブライト留学制度発足以来、毎年平均では5人強がコロンビア大学へ留学していることになり、フルブライトOBの数では米国の大学の中でも有数の大勢力になるかと思われる。

私は現在、会員1000人を超えるコロンビア大学日本同窓会の会長をおおせつかつているが、企業派遣その他一般留学生合算では、コロンビア大学への実際の留学生は2000人を超えられ、日本同窓会としては会員増強活動は不断の重要課題である。コロンビア大学へのフルブライト留学生でもわが日本同窓会に入会されている方はまだほんの一部に過ぎず、若い方々をはじめ未入会の方はぜひコロンビア大学日本同窓会のホームページを通じて入会をお願いしたいと思っている。(年会費不要、入会金5000円のみ)

コロンビア大学日本同窓会では会員向けの主要な活動として、年一回の総会、定期的なレクチャーミーティング、大学関係者の訪日に伴う接遇や会食、大学側の行事への参画と協力、同窓生が関係する施設などの見学会・アウトイングなどを開催、コロンビア大学と会員間の継続的関係の促進、かつ会員相互の親睦と理解を深めることを目的として熱心に活動している。最近では2004年4月にコロンビア大学創立250周年を記念し、コロンビア大学のボリンジャー総長をお迎えしてパレスホテルにて500人近い卒業生等が集い、式典を開催したのが印象深い大行事である。

この7月1日には、同窓会のレクチャーミーティングに国連UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)協会の事務局長である根本かおる氏(1994年コロンビア大学フルブライト)を講師に迎え、「国連難民援助活動に参画して」をテーマに講演をお願いし、多くの女性卒業生の参加も得て大変好評であった。

フルブライトとしてコロンビア大学を卒業させてもらって以来、はや40年、今も母校コロンビア大学への強い愛校心とフルブライト留学生としての強い誇りを持ち続け、両方の活動にはこれからも積極的に参加していきたいと思っている一人である。



今年7月、根本かおる氏の講演会後、同窓会旗を囲んで同窓生仲間と記念撮影。中央背広姿が山野氏。

## 「ある日の村野藤吾 —建築家の日記と知人への手紙—

古谷 善平

1959 Illinois Institute of Technology

Ontario Association of Architects

フルブライト留学の縁で、海外生活を始め、もう半世紀になりました。その間多くの人との出会いと別れがありました。その中で、最も感銘を受けたのが、建築家 故村野藤吾でした。

“一生の最後の日まで、鉛筆をはなさないでいたものだ”と念願しております”と言われた通りに、93歳で亡くなるその日まで生涯現役を貫き通した、その生き方は、人生観と芸術観そして、奉仕の心が深い確信に裏付けされたように、情熱に燃え立派な生涯を全うされました。

1984年に亡くなるまでの約20年間に戴いた70数通の書簡の中から、遺族と相談して、公開し、「ある日の村野藤吾—建築家の日記と知人への手紙」という本になり、2008年9月に、六耀社から出版されました。(注：知人への手紙というのは全て私宛のものです)(東京、六耀社、2008.191pp)

## 「ガリオア留学生の足跡」



ガリオア・フルブライト沖縄同窓会の比嘉幹郎氏(1954 U.C.Berkeley プセナリゾット(株)社長)が編集代表となって、55名の同窓生から集まったエッセイを1冊の本にまとめ、2008年に出版した。

戦後、米軍占領下にあった沖縄では、いわゆるガリオア(Government and Relief in Occupied Areas 占領地域の統治と救済)資金でアメリカへ留学生を送る制度が1972年の日本への返還までであった。返還後はフルブライト・プログラムに引き継がれたが、この本は「ガリオア留学生」55人が自らの留学体験を綴ったエッセイ集だ。

2008年時点で日本本土からガリオア・フルブライト資金で渡米したのは7200人余だが、沖縄からガリオア資金で留学した人数は複数回の場合も入れる

と1045人もいる。それだけ沖縄人の教育熱は高かったし、夢と希望を抱いて豊かなアメリカに渡った若者たちが多かったことを示している。

1949年の第一期生、伊江朝章氏は軍用機で沖縄から東京(立川)へ、さらに基地の島を経由して西海岸にたどり着いた。この年は2名のみ。伊江氏は鉄道でオハイオ州ウィッテンバーグ大学に留学し2年間を過ごした。帰国後は琉球大学教授として後進を育てた。責任編集者の比嘉幹郎氏は2期目の1950年に軍の輸送船で太平洋を渡った。1年間のニューメキシコ大学留学を終え、UCLA、UCバークレーと転校しつつ、日本人庭師のヘルパーやイチゴ摘み、ブドウ摘み、家事手伝いなどのアルバイトをしながら4年間のアメリカ生活を体験。後に沖縄県副知事なども歴任した。そして最後の年、1970年の留学生となった澤田清氏(ハワイ大学大学院)は、帰国後、国際ビジネスで活躍。澤田英語学院を設立して英語教育に貢献した。

さらに比嘉氏が尽力して「沖縄科学技術大学院大学学園法」が国会で成立、沖縄科学技術大学院大学(OIST)が2012年に恩納村に開学することになった。国が経費全額を援助しつつも、自由な学園運営が可能な「特別な学校法人」として、神経科学、数学・計算科学、サンゴなど海洋生物の研究を含む環境科学などをテーマにして世界最高レベルの教育研究機関となる。

## インタビュー

我謝 京子さん(1991 U. of Michigan)

## 映画「母の道、娘の選択」を監督して

(インタビュー 今井 華子)

「フルブライトは、私にとって人間になるためのプログラムだったんですよ」——この言葉の意味するところは、我謝京子さんが自ら出演・監督し、このほど東京国際女性映画祭の招へい作品となった映画「母の道、娘の選択」に詳しい。

この映画は、ニューヨークに住む日本女性たちが「日本を出た理由」や「罪悪感」、「日米の働き方の違い」「子育てと仕事との両立」を語る中で、その母親世代の思いをも描いたもので、我謝さん自身とその母の半生を軸に展開する。

我謝さんは雇用均等法施行後まもない1987年放送記者になり、結婚後、フルブライトのジャーナリスト・プログラムでミシガン大学へ留学した。それまですべてが仕事中心だった我謝さんは、そこでは

じめて「自分の身体の声に気づいた」という。そして卵巣摘出手術。だが今度は術後の服薬の副作用に悩まされ、医師からの「健康になるための選択肢」との助言もあって29歳で出産。フルブライトで「人生を考え直し、日米の文化に加えて母としての文化が自分の中に生まれた」と語る。

帰国した我謝さんは、阪神大震災やペルーの日本大使公邸人質事件など、再び取材で世界を飛び回る生活に。夫も同業だったことから、家族ぐるみで実家に頼る「パラサイトカップル」状態だった。プロとしては充実していたが「日常を伝えるのが記者なのに非日常的な暮らし方をしていてよいのだろうか」と悩み、別の部署へ異動。ところが張り合いを失ってしまい「今度は自分が壊れた」。2001年、ライター・経済記者として渡米した直後、今度は9・11に遭遇する。ワールドトレードセンターの真下の小学校にいる娘を気遣いながら日本へ中継するという体験もした。

「NYでは自称映画監督というのが本当に多いです。作品になるのは奇跡に近い」と我謝さん。そんな中で「母の道、娘の選択」はどうやって完成したのだろうか。「不思議な縁です」。取材を進めるうちにストーリーが続々と集まり、自作の試写会で編集の榎田尚代氏と出会う。そして2人、集まった膨大な量のテープを前に、2年間かけて粘り強く編集を続けた。「投げ出さず、あきらめずに走り続けたこと」が完成につながったと振り返る。

「この映画は成功例を集めたものではありません。人生にはいろいろな選択肢があること、その多様性を描きたかった。見た人が自分のことを重ね合わせることができる、連帯感のある映画になれば」と我謝さん。そして、5年かけてようやく出来上がった映画を一人でも多くの人に観ていただけたらと現在、世界中の映画祭にエントリーすると同時に、公開にむけて配給先を探している。映画完成の今、日本そして世界公開という、新たな挑戦に向けて、我謝さんは再び走り始めていた。



我謝京子さん

# 東京フルブライト・アソシエーション 2009年度総会 公開講演会

## 「これからの日本と世界」 原 丈人氏

(デフタ・パートナーズ・グループ会長)

フルブライト総会にお招き頂き有難うございます。今日は「これからの日本と世界」ということですが、どうあるべきかというより、私が今までに何をしてきたかとか、これから何が出来るかについてお話をしたいと思います。

私が今、アメリカをはじめ世界中でコンピューター中心のIT産業の次の基幹産業を作り上げる仕事をしています。コンピューターは現在の基幹産業ですが、この基幹産業こそ新しい価値を生み出し、人々を豊かにするものであると思います。

私が1985年にデフタ・パートナーズという新技術分野に特化した持ち株会社を作って以来ITを中心としたベンチャー企業の経営に深く関わってきました。社外取締役など新技術の発掘から製品として世に出るまで、経営に深く関わってきた会社ばかりです。

新しい技術を世に出すには、研究開発における数年の時間と、まとまった資金が必要となります。技術が実際に動くのかどうかのリスク（テクノロジーリスク）とそれを製品として作った際に市場に受け入れられるかというリスク（マーケットリスク）を乗り越えるために、我々は資金と経営の両面からその企業に注力していきます。これが、本来のベンチャーキャピタルでした。

インターネットのプロトコールTCP/IP、世界で初のインターネットサービスプロバイダー、UUネット、ビル・ゲイツを脅かしたソフトウエアのポーランドなど。世界初のものにチャレンジして、その技術を育てていくのですからリスクが高く失敗例も多いのですが、成功以上の値打ちがあると私は思っています。

私は新しい技術を育てていくなかで、ベンチャーキャピタルが変質していくのを感じました。機関投資家、ヘッジファンドなどが、短期に収益をあげることを強く要求してくるようになってきました。そうなれば中長期の研究開発をできなくするばかり

か、営々と積み立ててきた内部留保まで収奪にかかってくるのです。この新しい米国流の金融業界の米国資本主義は、われわれが作っていく企業を健全な方向、多くの人を幸せにする方向にむかっていないと感じるようになってきました。

短期に配当を大きくするために、会社の経営者と株主の利害を一致させる、報酬を今まででは考えられない額になるような成功連動の仕組みをつくるのです。1980年までは一般社員とCEOの給与の差は30倍でした（日本は10倍）。それが2007年では300から400倍のところが出てきている。2004年から2008年にかけて、米国の企業の配当性向はあがっていきませんが、従業員の平均給与は一定又は減少傾向にあります。昨年度のアメリカのヘッジファンド、トップ10人の個人報酬合計総額は1兆7600億円、トヨタの営業利益より大きい額になっています。これを突き詰めていくと、「会社は株主のもの」という従来アメリカで当然と受けとめられてきた考え方が根底にあることがわかります。このアメリカの風潮に対抗する為には「会社は株主のもの」という思考を修正していかなければならないと考えようになりました。

企業は従業員、顧客、仕入先をふくめたパブリックのものであり、「株主だけのもの」ではありません。短期的な株価の上昇だけに焦点を絞り込む米国の金融界の風潮から、エンロン、ワールドコム、リーマン・ショックとつながり、今回の「恐慌」にいたったのです。会社は実業を地道に行うことにより本業で利益をあげ、結果的に世の中に貢献していく。短期だけではなく中・長期とバランスよく投資する経営をしていく。人間社会が営んでいく為に必要な産業のすべてに人的資源、資本がゆきわたっていく社会を目指していく。株主も中期長期のリターンが最大となるので納得するようになる。これが私が提唱している、「公益資本主義」という考え方で99年頃からアライアンス・フォーラムで議論を開始し、昨年からは日米の若手研究者と東京財団をパ

ートナーに公益資本主義の理論構築と普及をすすめています。

アメリカ流資本主義でない「公益資本主義」を理論だけでなく、事例を作ろうと考えて2005年に始めたのがバングラデシュでの事業です。アジアの最貧国バングラデシュには世界最大のNGOの一つに「BRAC」がありますが、こことデフタ・パートナーズが合弁会社「bracNet」を作りました。まず、通信インフラを整備するのですが、大型交換機などを使えば莫大なコストがかかりますが、WIMAXという最新の無線技術を活用すれば、低コストで高速ブロードバンドサービスが提供できます。これでまず首都ダッカなど主要都市におけるインターネット接続業務の構築をし、次第に農村部へと拡大しています。

この営利組織の株式会社と非営利組織のNGOが共同で出資したハイブリッドな会社モデルは理想的な途上国支援のモデルとして世界銀行はじめ国際通貨基金や欧米の途上国支援担当官たちの注目を浴びました。

私が初期段階から経営に関わった会社で、XVDという画期的な画像圧縮技術を持っているところがありますが、この技術を使うと、公衆インターネット回線でハイビジョン・クオリティーの画像を離れた空間で瞬時につなぐことができます。このXVDシステムをバングラデシュでの遠隔医療や遠隔教育に使っています。ダッカの総合病院や大学と、PCを持たない農村部にeHutという一種のインターネット・カフェを作って結び、XVDの技術を使って鮮明な画像をやり取りすることによって、遠隔医療や遠隔教育が可能になるわけです。こうしたポスト・コンピュータの最新技術を使えば、従来の支援モデルに比べると数十分の一という低コストで途上国支援ができるのです。しかも企業は利益を上げ、事業は永続的に発展する。

この成功モデルを他のアジア、アフリカ、ラテンアメリカにも広めようと思います。国連NGOのWAFUNIF日本アジア機構を活用して、民間企業の制度で休職した人材やいろいろな若い専門家を現地に送り、実務経験を積んだあと、必要とする途上国に送り出しています。国連旗の下における民間による「顔の見える」途上国支援の実例を日本から創りだしていく。そのような人材が多く育てば、日本は途上国にとって、また世界にとって最も必要とされる国になるでしょう。また、自分自身にとって、やりがいのある、面白いことだと気づけば、本人の一生も豊かなものになるでしょう。

アフリカなど後発発展途上国では、栄養不良による飢餓の問題も深刻です。穀類など炭水化物の援助はあるのですが、たんぱく質の不足は依然として深刻です。アライアンス・フォーラム財団の途上国支援事業部門ではbracNetモデルと並行して、この飢餓の問題について「スピリナ」という高たんぱく質の藻を用いて解決しようとするプロジェクトを展開しています。

「ポスト・コンピュータの基幹産業は金融だ」という誤った考え方から今日の金融危機、経済混乱が起こっているわけですが、私は次代の基幹産業を創りだすものはコミュニケーター産業PUC（パーベシブ・ユビキタス・コミュニケーション）だと考えています。こうした新技術を育てていけば、世界から優れた人材と資金が日本に集まってくるし、企業は活性化し、法人税を下げてもまだ税収は増え、税金をあまり使わなくても民間からの資金で途上国支援ができます。CO<sub>2</sub>排出量取引などのインチキな市場ではなく、「実業」のある市場システムが必要なのです。「公益資本主義」を発信し、「顔の見える」途上国支援をすることで、先進国・途上国にとって必要な日本となるよう、進めて参りたいと思います。

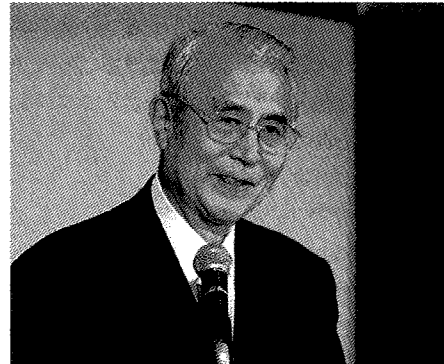


52年大阪生まれ。慶大法卒。スタンフォード大学院修了。84年デフタ・パートナーズ設立。90年代に代表的な米ベンチャーキャピタリストの一人に。日本の財務省参与。国連機関大使として途上国支援に従事。



会長の総会あいさつ

長坂 健二郎 会長  
1962 Columbia U.



おかげ様をもちまして、過去一年間、大変順調に会の運営をすることができました。予算ですが、このフルブライトの活動は5億5000万円ぐらいの規模で、日米往復で100名ほどが留学しております。その中には私ども同窓会がプライベートに集めた資金も投入されております。しかし、日米関係の重要性を考えると、ぜひもう少し増強したいというのが私どもの願でした。民間募金はおかげさまで実質2億円を超えるお金が集まりました。本当に有難うございました。

その募金をテコにして、アメリカ政府に予算の増額をお願いしましたところ、50万ドル—100円換算で5000万円の増額を了解してくれました。もうひとつ、それを踏まえて日本の文科省にもお願いをしまして、6000万円が増額されました。つまり1億1000万円ぐらい増えるわけです。

そこで、現在のアカデミア偏重を是正するというわれわれのもう一つの願いを実現することを考えました。フルブライト上院議員のご著書などを拝見すると、幅広い層から将来のリーダーを育て、交流していきたいということです。ところが、いまはいささかアカデミアに偏重している。これでは学者の交流基金になってしまう。本来の姿とはちがうものになっています。今度日本政府が増やした6000万円について、将来のビジネス・リーダー候補に絞って10名の特別枠を設けるといことで、本来のフルブライトのプログラム精神に戻すということです。

ビジネスの分野だと普通はMBA2年なので、1年はフルブライトで出し、あとの1年を協賛企業などをお願いできればと、考えています。どうぞご支援のほど、お願いいたします。

予算が許せば、マスメディアの分野やアート、音楽、教育、さらにスポーツ・インストラクターなんかも増やせないかというアイデアがでております。まだ検討段階ですので、皆様のアイデアをぜひお聞かせいただきたいと思います。

また、東京フルブライト・アソシエーションの事務所を地下から4階に移すというアイデアがあります。当然、費用も増えるわけですが、幸い日米教育委員会のご協力で、委員会事務局のスタッフの一名が私どもの事務所に出向してくださることで、プラス・マイナス、若干プラスになるぐらいの計算になります。4階はよい環境ですので、どうぞ皆様お気軽にお集まりいただきたいと思います。

また、来年は役員陣が一斉に任期満了を迎えることになります。財団理事長の賀来さんと私も内規によりまして4年になりますので、退任ということになります。理事長ポストと会長ポストについて、今から早めに募集しますので、われと思わん方は、ぜひ手を上げていただきたい。

予算・決算につきましては、表を参照していただきたいと思いますが、予算面で会費を500万円集めようと努力しましたが、400万円しか集まらなかった。どうも1969年ぐらいを境にして、同窓会の会員の人数ががっくり減っているわけです。先輩のほうがかんたん卒業していかれて、若い年代に比重が移ってくると、全体の人数、活動人員の減少が避けられないところです。

同窓会員を増やし、活動してくださる方の比率を上げる努力も必要ですが、あまりフルブライトだけにこだわっているとジリ貧になってしまう。少し世界を広げてみようという試みを今回の総会後の講演会でいたしました。新聞広告などもして、一般の方も講演会にどうぞお越しください、一緒に勉強しましょうと呼びかけたわけです。700人ほどの応募がございました。今回は日米教育委員会と私ども東京フルブライト・アソシエーションの共催という形で公開講演会を開かせていただきます。

2008 / 2009 年度役員 (敬称略)

- 会長：長坂健二郎
- 副会長：佐藤ギン子、千本倅生、竹内洋、住田良能、森本泰生、金田 新、グレン S. フクシマ
- 監査役：原田敬美
- Alumni Meetings 委員長：福田 学  
副委員長：神戸伸輔、増井志津代
- Hospitality Committee 委員長：島田道子  
副委員長：外池滋生、山田真之、大倉健太郎、五所恵実子
- Publicity 委員長：松尾秀助  
副委員長：今井章子
- Foundation Liaison 委員長：金田 新 (兼務)
- 顧問：渡辺 宏、行天豊雄、橋本 徹、金子尚志、開原成允、南原 晃、有馬朗人

2008 年度決算・2009 年度予算比較表

(単位：千円)

	2008 年度決算	2009 年度予算
<b>I 収入の部</b>		
会費	3,926	4,500
寄付金	22	0
受取利息	10	20
募金手数料	3,155	825
P C 賃貸料	120	120
広告料収入	350	350
雑収入	0	0
当期収入計 (A)	7,583	5,815
前期繰越	15,641	15,924
収入合計 (B)	23,224	21,739
<b>II 支出の部</b>		
水道光熱費	168	170
旅費交通費	327	260
通信費	1,545	1,400
印刷製本費	1,178	800
什器備品	53	130
修繕費	0	50
消耗品費	42	40
地代家賃	242	310
倉庫料	25	50
会合費	548	540
事務用品費	111	100
給料手当	2,626	1,800
奨学生費	211	300
支払手数料	14	20
図書購入費	0	20
会議費	115	120
雑費	48	50
損害保険	5	5
保守点検費	42	42
予備費	0	200
当期支出合計 (C)	7,300	6,407
当期収支差額 (A)-(C)	283	-592
50周年記念出版売却代金 (E)	0	0
次期繰越 (B)-(C)-(E)	15,924	15,332

2008 年度会務報告

- 08.04.17(木) 2008 年度総会・講演会・懇親会 (於学生会館)  
[講師] 船橋 洋一 朝日新聞社主筆  
[出席者] 会員・家族 44 名、招待者 17 名、合計 61 名
- 08.05.27(火) 米国人ニュー・グランティーのための国会および最高裁判所見学会  
[参加者] 米国人ニュー・グランティー他 10 名、関係者 5 名、合計 19 名
- 08.06.05(木) 「フルブライト上院議員生誕 100 周年記念企業・団体募金」最終報告とお礼の会 (於国際文化会館)  
[参加者] 発起人他 29 名、関係者 38 名、合計 67 名
- 08.06.10(火) JFMF 夕食ボランティア [協力者] 25 名
- 08.06.16(月) JFMF 都市同行ボランティア  
茨城県神栖市、栃木県下野市、東京都多摩市、千葉県香取市 各 1 名、計 4 名同行
- 08.06.30(月) 日米教育交流振興財団 08 年度第 1 回評議員会・理事会 (於フルブライト・ジャパン会議室)
- 08.07.19-21 (土~月) 日光・宇都宮ツアー  
[参加者] 米国人ニュー・グランティー他 13 名、同行者 2 名、計 15 名
- 08.08. ホスト・ファミリー・マッチング [希望者] グランティー 5 名、会員 6 名
- 08.10.14(火) JFMF 夕食ボランティア [協力者] 18 名
- 08.10.20(月) JFMF 都市同行ボランティア  
長野県飯田市 1 名同行
- 08.10.20(月) 第 33 回日米交流チャリティ・ゴルフ大会 (於戸塚カントリー倶楽部)  
[参加者] 121 名  
[募金額] 669 万円
- 08.10.23-25 (木~土) U.S. Fulbright Association 31st Annual Conference (Beijing) に会員 4 名参加
- 08.11.07(金) ニュー米国人・グランティー歓迎会 / ~8 年同期会 (於大手町サンケイプラザ)  
[出席者] ニュー・グランティー・家族 19 名、招待者 19 名、会員・家族 41 名、合計 79 名
- 08.11.14(金) 第 15 回セミナー (於山王グランドビル貸会議室)  
[講師] 関山 健 (たかし) 氏  
[テーマ] 「米新政権の対外交と日本の対応」  
[出席者] 会員他 19 名
- 08.11.23(日) 第 5 回鎌倉ウォーキング・ツアー  
[参加者] 米国人ニュー・グランティー同伴者 5 名、会員・家族 16 名、計 21 名
- 08.12.10(水) ニューズレター Vol. 21 発行
- 09.01.16(金) 第 16 回セミナー (於山王グランドビル貸会議室)  
[講師] 定森 大治 氏  
[テーマ] 「米新政権下の中東情勢を予測する」  
[出席者] 会員他 25 名
- 09.02.27(金) 2008 年度東京フルブライト・アソシエーション定例役員会 (於フルブライト・ジャパン会議室)
- 09.03.27(金) 日米教育交流振興財団 08 年度第 2 回評議員会・理事会 (於フルブライト・ジャパン会議室)

# 若手フルブライト体験者は 何を考えているか?

構成・松尾 秀助 (1977 American U.)

## ■はじめに——問題提起

「ビジョン委員会報告」という文書が2007年に提出された。原田敬美氏を委員長とする「東京フルブライト・アソシエーション ビジョン委員会」による報告書で、「東京フルブライト・アソシエーション (TFA = 同窓会) の今後のビジョンについて」検討した。

その検討の背景には、1982年の発足以来、それ相応の成果を挙げてきたとはいうものの、会員の高齢化、会員数および会費収入の減少の問題が深刻化してきたことがあった。2008年の時点で、会員の年度別人数、とグラントー総数から計算した「入会率」を見ると、以下の通り。

- 1940年代=会員数5人 (はともかくとして)
- 1950年代=会員数954人、入会率33%
- 1960年代=会員数935人、入会率44% (1969年まではグラントー数が多く、年平均254人だった。70年代以降は平均55人くらい)
- 1970年代=会員数194人、入会率50%
- 1980年代=会員数347人、入会率53%
- 1990年代=会員数338人、入会率54%
- 2000年代=会員数102人、入会率22% (2008年まで)。

こうしてみると、1990年代までは約半数が同窓会に入会しているのに反して、2000年以降はぐんと減少している。1999年を最近のピークとして、以後毎年(グラントー数は50人前後で変わらないのに)同窓会会員数は激減の一途をたどっている。近年の会員総数は約3000人前後で推移しているが、約70%弱が1960年代以前の留学会員だ。この傾向が続くとすると、いずれ会員数1000人以下という時代が来るだろう。当然、会費収入も比例して減少するから、TFAの活動もそれだけ縮小せざるを得ない。

この現象は何が原因なのか? 若手グラントー経験者たちは何を考えているのか? どうすれば同窓会に入り、同窓会活動に参加してもらえるだろうか? この問題を解くために、我々(パブリシティ

ー委員会)はアンケートを実施し、2001年以降に留学したグラントー体験者9人から回答をいただいた。多忙にもかかわらずご協力いただいた方々に深く感謝したい。

質問項目は同窓会活動に関してだけでなく、フルブライト体験そのものについても広げた。その体験の重さ・深さが帰国後のキャリアに影響し、ひいては同窓会への意識にも関わってくると考えたからだ。

## ■留学するについての問題

「留学前のキャリアを離れるのに周囲の理解を得ることができましたか?」という質問には、おおむね難しいことはなかった、との回答が多かった。ただ、福島民友新聞勤務の藍原寛子さん(2005 Miami U.)は、「フルブライトのジャーナリスト・プログラムによる留学について、周囲があまり知りませんでした」と言う。上司や同僚に説明して理解してもらうのに時間がかかった、という。また、「大手マスコミの記者は社費留学の制度や特派員制度があり、そちらを優先するように思います。地方の新聞社やテレビ局にはそうした制度がないところが多いので、ぜひ地方の応募を推進すべきと考えます」とも。

会社を説得するにはなにがしかの難題はあるようで、2004年留学のKさんは、「学問が役に立たないと人事(部)が思っていた。人から学ぶ姿勢を持たない組織はいずれ破綻する」と日本の会社組織に対して辛辣だ。Kさんは帰国後、日本企業から米系企業に転職している。逆に菊地秀行さん(2004 U. C. Irvine)は、「フルブライトという広く認知されている奨学金でなければ、そもそも休職自体が認められなかった可能性が高い」というケースも。

留学中はみんな十分に研究と生活をエンジョイしたようだ。社会福祉(医療倫理・臓器移植)をテーマにした藍原さんは、「医療専門家の資格がないにもかかわらず、メディカルスクールの客員研究員として受け入れていただきました。さらに病院や臓器

幹旋機関OPOの訓練生のIDをいただき、病院のカンファレンス参加、大学関連病院のオペ室での臓器摘出や移植手術の視察や研究をさせていただいた。植地卓郎さん(2001~2003 U. of Pennsylvania)は滞米中もさることながら、「東京での留学準備中に、素晴らしいホストファミリーをご紹介いただいた。留学前には、先方家族全員と私たち夫婦で、鎌倉を散策する機会や、夕食をご一緒する機会を得た。留学後は、休暇にサマーハウスに招いていただいたり、卒業後の進路選択で相談に乗っていただくなど、とてもよくしていただいた」。

英語科教諭だった男性は、留学先での教育実習(Practicum)が最も記憶に残っていると言う。出身国、母国語、米国での生活年数が様々な20人のクラスで英語を教えた。「学生の中に、マンハッタン生活20年目でSpeaking力はNativeレベル、ただし文法に関しては、初級レベルという人もおり、生徒に多くのことを教わりつつ、逆に育てていただいているような感覚を持ちつつ、実習をつづけました」

菊地秀行さんは、「学生が教授とファーストネームで呼び合ったり、短パンにサンダルといったまさに西海岸のいでたちで、ドーナツやコーヒー片手に授業に臨んだりする」カジュアルなキャンパスの雰囲気新鮮だったという。一方で勉強熱心な学生たちが夜中過ぎでも続々と図書館に集まってくるのに驚いた。

## ■帰国後のキャリア、仕事環境の変化

福島民友の記者である藍原さんは、帰国後、仕事に復帰し、「米国の日系移民の取材(年間連載)をする機会が得られました。帰国後は、『留学してきた』ということで、何に関しても、より高いハード

ルが求められました。海外留学した社会人にはみな、いっそうの社会貢献度が求められると思います」。

植地卓郎さんも、フルブライトでの経験は、「プラスの影響は甚大」と言う。「日本に戻ってからの仕事上でも、フルブライトであることで最初から信頼していただけるケースも多く、逆にフルブライトの名に恥じぬ仕事をすべし、と肝に銘じている」。

「アメリカでやっていたテーマ(陪審制と市民参加)のリサーチが外部の関係者(弁護士会や法務省)の方々の目に留まり、だんだんそういう方々と一緒に仕事をすることが増えてきました」と言うのはJapan Timesの記者である神谷説子さん(2005 UC Berkeley)。リサーチを活かして共著の本も出版できた。

2004年に留学したKさんは、帰国後、3回リストラを経験し、アメリカ系企業に転職したという体験から、「年功序列と、年次をつむことによる給与、税制の優遇がすべての元凶」と言い切る。「ハイエナではなく、欧米系の優良企業がしている360度評価などを取り入れた実力主義を」と提唱。

国際交流基金の日米センターで仕事をしていた後藤愛さん(2007 Harvard U.)は、帰国後、欧州と中東を担当することになった。それまで米国一辺倒だったが、「世界を相対的に眺めるために非常に有益な経験となっている」と言う。ただし、「米国での経験は、現在の世界のいろいろな面でスタンダードとなっているものを学べるという利点がある」とも。

土井秀文さん(2004 Harvard U.)は、「やはり留学前に所属していた組織等に戻った場合のソフトランディングは容易ではない」と言う。しかし、社会への関わり方ではフルブライト体験は「多大なプラ



若いグラントー体験者たちには、帰国後のフルブライト活動への参加が望まれる



スの影響があった」。以前はいわゆる「会社人間」だった土井さんは、帰国後、市役所の審議会を手伝い、娘の幼稚園の保護者会、NPO役員など、「会社の仕事以外の活動の比率が年々増えています」。

30代最後にそれまで10年余り勤めていた国連の専門機関ユネスコ（パリ本部）を辞め、一橋大学大学院博士課程に在籍中にフルブライト・プログラムで留学（2006 Harvard U.）した蓮生郁代さんは、留学から帰ってすぐに法学博士号を取得した。「その後、さまざまな大学の教員募集（公募）にしらみつぶしに応募しました。……（採用内定の通知が来るまで）なんの保障もない毎日には心底めげましたし、精神的にも本当に不安な日々をすごしました」（現在は大阪大学大学院准教授）

アンケートをお願いした方の中には、現在まだソフトラディングに苦勞されているケースもあり、そのために回答を控えられた方もおられたことを付記しておく。

#### ■フルブライト活動への参加

「帰国後から現在まで、フルブライト活動（総会やセミナー出席、ニューグランティ歓迎会やボランティアなど）に参加されたことはありますか？」という設問に移ろう。

福島民友の藍原さんは、「東北同窓会に参加しています」と言う。「ジャーナリスト・プログラム参加者による会合も開きたい」「ジャーナリスト・プログラム参加者による体験談をまとめた書籍の発表などをしていきたい」と意欲的だ。

現在、転勤で広島に在住の土井秀文さんは、「中国地区同窓会が開催している、大学職員プログラム来広時のレセプションに参加しています。今年は家族で出席させていただき、皆さんに娘を大変可愛がっていただきました」と答える。また、「先日の東京で行われた原丈人さんのセミナーと、その後の懇親会では、行天豊雄さんや明石康さんをはじめ、著名なフルブライトの大先輩方にお目にかかることができ、大変勉強になりました」と言う。

たしかに後藤愛さんが言うように、「若手フルブライターが同窓会活動に参加するメリットを考えると、①同年代のフルブライターに会える（異業種交流会のノリ、自分のキャリア・ディベロップメントのため）。②年配の有名人フルブライターに会える（普段の自分のネットワークでは会えない『大物』と出会う。しかも『フルブライター』という共通項により仲間のように知り合うことができる）。主にこの2点」と言えるかもしれない。

ただ、「年次の多い方々の輪には正直入りづらいように思った」「私はあまり高齢者向けの講演は好みません」「これまでの（同窓会の）プログラムは、中高年のための企画、という印象」という辛口の（しかし、傾聴すべき）意見があった。

#### ■将来の同窓会活動への提言

「将来、こういうことならフルブライト活動に参加できる、参加したい、というようなご意見をお聞かせください」「最後に自由にあなたのご意見を」という項目には、さまざまな提案があって、参考になる。

藍原さんはフルブライト・ジャーナリスト・プログラム帰国後、1年をはさんで別の奨学金留学プログラムでフィリピンに留学した。その体験からこう語る。「こちらのフェローシップは、日本、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシアの5カ国からのフェローが参加するのですが、途上国での滞在ということで、フェローがお互いに助け合うなど親密度が高くなっています。研究報告書の作成、公表もあり、成果を外に出していこうという姿勢があり、その点ではフルブライトもフェロー同士でその成果を共有しあい、内外に提供していくというアウトプットがより求められていくと思います」

植地さんは、「同窓会費のクレジット払いをすぐにやるべき。毎年振り込みするのは大変わずらわしい」「ゴルフを休日にやれないでしょうか。平日にゴルフ目的で休めるのはどうしてもリタイヤした世代の方に限られ若手から中堅の参画の活性化には逆行すると思います」と、具体的な提案をされる。

土井秀文さんも、「現在開催されているゴルフコンペは、一定の年代から下にはやや敷居が高いように思います。カラオケ大会まで敷居を下げる必要はないと思いますが、中をとってBBQやガーデンパーティーのような、もう少し気楽かつ費用的にも気軽に参加できるイベントはどうでしょうか」と提言。

神谷説子さんは、「下手をすると、同窓会組織があること自体があまりしっかりと認識されていないかもしれません。……たとえば、奨学金を受けることが決まった段階で、同窓会組織のアピールをするなど、方法はいろいろとあると思います」と言う。そして、「若年会員は忙しくて、なかなか同窓会活動に参加しない、というのは大学の同窓会も同じ課題を抱えていると思います。慶応大学の三田会などは、かなり強いつながりを持っているようなイメージがあるのですが、そういうところの活動から何かヒントを得られることがあるかもしれません」とい



フルブライト上院議員生誕100周年記念に  
集まった人々で記念撮影

うアイデアを出している。

後藤愛さん「働く女性、とくにワーキング・マザーに関して、意見交換ができる企画に参加したいです。……夜のイベントは重かったり、フォーマルだったりするので、たとえば、土曜ランチなど、気軽に明るく参加できる会があってもよいと思います」「私の母校、一橋大学では、大規模なOB/OG会『如水会』の中に、『平成卒業生の会』と題して、平成年度に卒業した卒業生だけを対象とした会が発足しており、その運営は、平成年度の卒業生の有志が務めています。そのような運営もありかな……と思いました。たとえば、『21世紀 渡米者の会』とかででしょうか」——なかなか現実的な提案である。

お子さんがいらっしゃる蓮生郁代さんは、「週末や長期休暇中に、娘（8歳）と一緒に参加できるようなボランティア活動があれば、ぜひ参加したいです」と語った後、「フルブライト（同窓会の）活動は、知的レベルも社会的ステータスも経済的レベルもすべて高い方たちの集まりのせい、ごく普通の庶民的な生活をしている私には、ちょっと敷居が高い感じがします。難民支援のボランティアなど、小さな子供も含めて普通の家族が一緒に貢献できる、アットホームな感じの地域社会貢献型の行事（アメリカの教会のコミュニティ活動のような行事）がもっとあってもよいのではないかしら、と思います」と言う。傾聴に値するご意見だと思う。

また、福島県に住む藍原さんの次のようなご意見も検討すべきことかもしれない。「地方在住者にとっては、会社や県内、地域でのフルブライターが『点』の状態、正直残念です。今後はフルブライト・プログラムのメリットを広く知ってもらうため、首都圏だけでなく、地方でもシンポジウム開催や本出版など、全国規模のアピール活動を進めてい

く必要があると考えています」

#### ■おわりに

以上のアンケート回答者は、全員同窓会に入っており、スケジュールさえ合えば、積極的に参加しようという気概をもっている人たちである。本当は同窓会に入っていないグランティ経験者に、なぜ入らないのか、を問うべきであったろう。それは次の課題として実施してみたい。

神谷さんが言うとおりの、仕事以外の団体・グループ活動に参加しないのは、とくに近年の若者たちに共通した風潮だ。いわんや、フルブライト・アソシエーションのように比較的年配者が多い同窓会に積極的に参加しようという若者が少ないのは、時代の流れとも言えよう。

ただ、不可抗力とあきらめてしまっただけでは、ジリ貧状態は止まらない。上述のような貴重なご意見が参考になるかもしれない。藍原さんや土井さんのような地方都市在住の同窓生をうまく巻き込める全国規模の活動も必要だろう。後藤さんが提案される「21世紀 渡米者の会」というアイデアは面白い。同年代の会があれば、横のつながりとして機能するかもしれない。「異業種交流会のようなノリ」でもいいではないか。ただ、それをマネージするためには、大いなるエネルギーを出す中心人物が必要なのだが。

JUSECとも連携して、グランティになったと同時に同窓会への入会を促し、帰国後の人には繰り返し入会を勧誘する必要がある。そのためにも、若者にも魅力のあるカジュアルな雰囲気をつくりたい。できることから一つ一つ実現していく同窓会であってほしい。

# 三上基金と第1回三上フォーラム

2009年7月17日 於都留文科大学

(報告) 大野 熙 1956 Northwestern U.

奨学生対象の募金を税金の対象外とする公益法人という財団となったのが、1986年でした。第一回4,400万円、1987年度に終了した第二回は4,600万円となりました。以来5,000万円のペースで推移していて、2003年に都留文科大学教授の三上泰永(みかみ・やすひさ)氏のご遺志により、1億3,500万円が三上基金として設置をみました。これは大阪の篤志家、志野義治氏の私財、1億1,000万円(1989年)と並んで日米留学生の為の二大基金となって今日に至っています。

故三上教授はフルブライト第一回生として、1953年テキサス大(オースティン)でBachelorの学位を取られ、帰国後1956年に早稲田大学で修士号を取得されました。1964年に都留文科大学文学部英文科の講師になられ、1972年に教授に就任され、1995年に退職名誉教授となりました。オースティンでのオリエンテーション仲間の堀江昭氏(1952 U. of Colorado)による本Newsletter(2003年16号寄稿)回想文から引用させていただくと、正義感に燃え、時流におもねらない硬骨漢で、大変厳しい先生でいらしたようでした。2002年12月7日享年73歳で逝去されました。

2003年12月5日、教授のゆかりの都留文科大学で、一周忌にあたり追悼講演会が開催され、当時の日米教育委員会事務局長、サムエル M. シェパード氏が講演を行いました。その後、故三上教授の偉業を記念するフォーラムの準備が、教授の愛弟子でいらっしゃる西出公之教授(フルブライト留学生、1990 Wright State U.)によって企画されていました。今回やっと実現の運びとなり、本年度の当基金奨学生、フォスター、ヘイウッド両氏が講演者となって開催の運びとなりました。開催連絡が直前であったため、何とかやりくりして、日米教育委員会のサターホワイト博士と同窓会事務局から大野が駆けつけることができました。三上基金冠奨学生両氏の講演はすごく迫力充分で期待を裏切らない素晴らしい出来でした。

以下現地入り直後のレポートを臨場感そのままに掲載いたします。



ありし日の三上教授

(第一回三上Forum報告)

故三上泰永都留文科大学教授の第一回のForumが山梨県都留市の都留文科大で、三上基金のグラウンティ-2名を招待して、7月17日(金)午後から同大に於いて行われた。東京からは、日米教育委員会のサターホワイト、東京フルブライト・アソシエーションからは大野の両事務局長が参加した。本年度の米国からの奨学生は2名で詳細は下記の通り：

1. Colin H. Haywood, 日本文学専攻(中部大学) Earlham Coll. IN, (早稲田大留学経験有)
2. Drew M. Foster, 社会学専攻(広島大) Colorado Coll. (早稲田大留学経験有)

以下、2氏のやる気一杯の講義を傍聴し、全体はスペース的に無理なので、特徴的に的をしぼって筆者なりの感想を述べる。

最初のスピーカーはヘイウッド氏であった。樋口一葉の父親の先祖が、たまたま山梨県甲府だそう、彼はやる気満々でこの願ってもない機会に樋口一葉をもっと知りたいとこの地にやってきている感じであった。樋口一葉が近代日本史上、初の職業女流作家、しかも肺病で亡くなる短期間1年2ヶ月の間に「たけくらべ」「にぎりえ」を始め奇跡的な十数編の

小説を発表し、森鷗外、幸田露伴から絶賛を受けた。ところが彼女は幼少より父親が文才を見抜き、家庭教師をつけ7千の和歌を作っていたのである。ヘイウッド氏はそれに挑戦しようとした。その為には、基礎知識として万葉、新古今和歌集の理解が必要ということで多忙をきわめることになっている。そして、日本人の研究者が少ない一葉の和歌の中から珠玉の歌を発掘していくというのが狙い目である。

日本語原文：なみ風のありもあらずも何かせん  
一葉のふねのうきよ也けり

英訳：Life's storms and trials come and go, and  
I Not but a leaf, upon a troubled sea?

- かけことばの説明があり、「浮き」と「憂き」の舟からの「浮き」と無常であるこの世、つらくはかない世が両方かかっていること。
- 一葉は葉っぱの舟という意味と、自分(樋口一葉)の両方を意味しているの、英語の第一人称の“I”を導入したとの説明には、感性の鋭さを印象づけるのに充分であった。

24歳で没した一葉に、ほぼ同じ年でアメリカ人ながら、これから米国のPh.D(博士)の資格を取るまで深く研究していこうという雄大なころざしには敬意を表したい。もう少し安い紙幣(5千円ではなく)に顔を載せてくれたら、米国へ帰国してから友人関係者に渡すのに助かるのというジョークもまた楽しい。短い時間ではあったが、彼の才能を垣間見ることができたのは望外の発見であった。

次のスピーカーはフォスター氏で、題は「独立採算を迫られている国立大学が打ち出す独自の特色について」であった。この背景には、18歳人口の激しい減少、従来と異なり文部科学省が毎年予算を容赦なく削減している現状がある。中には既に募集し

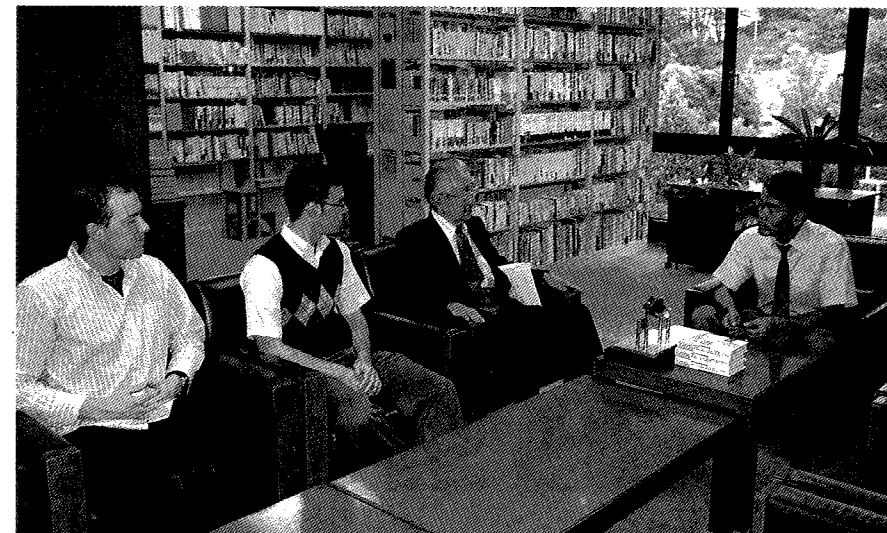
ても集まらない分野の学科は、教授が老齢化して引退と同時に閉鎖しているところも出ているようである。どのようにして、各大学において、新18歳が魅力を感じる特色を出していくかがテーマである。この調査は時間と労力を必要とするかなり大変なもので、しかも相手があるので、どこでも、というわけにはいかず、調査するフォスター氏の日本語力の問題もあり、難しい問題含みとお見受けした。

予備調査は東日本で行い、この一年は彼が籍をおいている広島大学から近い、西日本の国立大学に絞り込んでいる。旅費もばかにならないので、近くにあるところに頻度をあげて、効率も考えている。この一年は、中国、四国地方は強烈な経済不況におそわれていて、大学といえども影響がないとはいえない。傾向としては、東京、京阪神に多くの卒業生が職を得ており、その縦のつながりがそれぞれの大学の独自の学風、伝統を形づくっている。

全国600の大学といっても、国立大学はその地方のそれぞれのアカデミアの頂点であり、18歳のそれぞれの県の高校のトップ層が挑戦している(何といっても学費が安いのと、私立に比して教授陣が優秀ということ)。

フォスター氏の調査はスケールが大きいので、この一年で不足の部分は、積み残してもまた次の機会にやるという方法もある。

フォスター氏の視点で大きく欠落している大事な点を痛感したので、簡単に触れたい。国立大といっても、彼の選んだ西日本の大学は、全日本から見ると全体からみて影響力の小さいところが多い。旧帝大、東工大、一ツ橋、お茶ノ水の卒業生に比して、各県の国立大は、就職先の明細を見ても著しい格差がある。昔に比して、終身雇用制から成績、実力制



都留文科大学での三上フォーラム

度が台頭しつつあるといっても、日本の根幹である一部、二部上場企業への採用の門が地方国立大学卒業生からは非常に狭いのが現実の実態である。中国、韓国ほどではないが、大学卒業生の就職状況は大きな見逃せない影響大の要素である。アメリカの各専門学部単位での優劣の評価、リベラル・アーツ系の独特の伝統教育等は日本には存在しない。フォスター氏の母校は、超一流の後者で、優秀な卒業生を長年にわたって輩出しているの、このあたりから日本とズレが出たのかもしれない。東京中心の影響も考えた結論が好ましい。

以上レポートでした。

今後第2回も計画されている由、成功をお祈りする次第です。

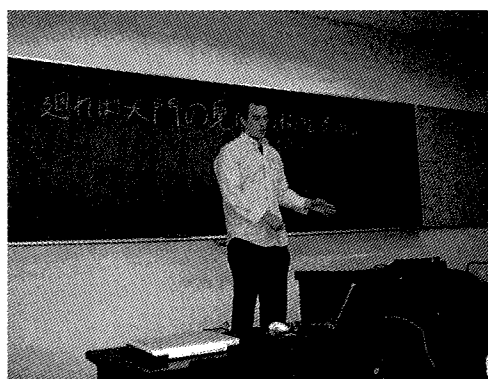
アメリカの名門大学に入るには、成績優秀もさることながら、課外活動、特にボランティア的な学校外、コミュニティでリーダー的な活動を行うことが、高く評価されます。これは将来同窓生として活躍を期待するというアメリカのプラグマティズムの反映もあると思われます。日本の高等学校での入試向けの集中ガリ勉、筆記試験で合計が1点でも高ければ合格という制度とはまったく違う文化です。韓国、台湾、中国は日本に類似している感じです。日本は終身雇用制、年功序列を柱に、敗戦からトップグループの上位までのし上がってきました。先の選挙で鳩山内閣に政権交代となっても、中産階級中心の社会構造は最下位層の格上げはあっても今までと大きな変化はありません。仕事とはなれた余暇に、日本独特の「生き方」が出てくると思われます。寄付に対する感覚も大いに変化していくでしょう。フルブライト寄付活動も、「恩返し」プラスαをめざした新機軸、ニューコンセプトが望まれます。滞米中に接したアメリカの人達への好感がその後の対米判断の基礎になっていることは同窓生の誰もが同じだと思います。



テキサス州立大学に留学中の三上さん

昨年、北京でのフルブライト第31回世界総会、今年のワシントンで本部の人達との会話の中で、政府資金ではドイツ、韓国、日本、中国と、フルブライト同窓生の数の多いトップグループの国の中で、日本は企業からの寄付を集め、チャリティ・ゴルフも30年以上挙げて奨学金を捻出している唯一の国であることが各国のみんなの賞賛的となっています。二十数年まえ、フルブライト元上院議員が「どうして、ドイツもフランスも日本のようにできないのか」と言われていたそうですが、日本の文化、国民性、恩を受けたら返すという考え方の違いから差がでてきたように思われます。

毎月のように、主力年齢層同窓生の家族から物故者の訃報が届きます。遺産から国への税金も当然ですが、同窓会としては将来につながっていく若者への奨学金の形として、また寄付される方々の名前が将来10年くらい機関誌の誌上で後続の方々にも納得できるようなかたちで伝承できるメカニズムができないかなと思案しております。皆さんのアイデアを是非お聞かせください。



樋口一葉について語るヘイウッド氏

## 2009年度財団奨学生冠名リスト

採用者数	冠名(敬称略)	奨学生名	カテゴリ	受入大学名	出身大学(最終)名
Fulbright Fellows (Recent B.A.)	… FF				7名
Graduate Research Fellows (Graduate Students)	… GRF				3名
Graduate Students - Japanese	… GSJ				2名
<b>&lt; Americans &gt;</b>					
1. 三上基金	TERZUOLO, Chiara P.	FF	神戸大学 (民族音楽学)	Lawrence U. (East Asian Studies)	
2. 三上基金	KAUFMANN, Nicholas D.	FF	九州大学 (工学)	Lewis & Clark College (Sociology/Anthropology)	
3. 志野基金	WINOGRAD, Rachel E.	FF	同志社大学 (社会学)	Dartmouth College (Japanese Language and Literature)	
4. 三菱グループ	TRAN, May	FF	理化学研究所 (生物学)	U. of Chicago (Biological Science)	
5. YKK	MILSK, Rebecca Y.	FF	京都大学 (化学)	U. of Illinois at Urbana-Champaign (Chemistry)	
6. TFA-1	ROWLAND, Courtney L.	FF	金沢大学 (教育学)	Arizona State U. (Secondary Education in Math)	
7. TFA-2	SAKAI, Toku	FF	広島大学 (国際関係)	Northwestern U. (History/International Studies)	
8. TFA-3	YELLEN, Jeremy A.	GRF	東京大学 (歴史)	Harvard U. (History)	
9. TFA-4	ROQUET, Paul	GRF	立教大学 (映画)	UC Berkeley (Film Studies)	
10. TFA-5	HOVE, Michael J.	GRF	東京工業大学 (心理学)	Cornell U. (Psychology)	
<b>&lt; Japanese &gt;</b>					
1. YKK	茂木 快治	GSJ	U. of North Carolina (Economics)	早稲田大学 (大学院経済学研究科)	
2. TFA-6	原 聖吾	GSJ	Stanford U. (Business School)	日本医療政策機構 (東京大学医学部卒)	

寄付企業・個人名(敬称略)

TFA-1~6 第一三共株式会社、米国メルク社、AIG、個人、匿名

## 日米教育交流振興財団の状況

○下記ホームページ、日米教育交流振興財団『ディスクロージャー資料』にて、次の資料を公開しております。

<http://www.fulbright.or.jp>

- ・寄付行為・役員名簿・事業報告書・貸借対照表・正味財産増減計算書・財務諸表注記・財産目録
- ・収支計算書・収支計算書注記・独立監査人の監査報告書・監査報告書・事業計画書

### 財団法人 日米教育交流振興財団・地区別役員等 (敬称略)

地区	顧問 (4)	理事 (25)	監事 (3)	評議員 (22)	審査委員 (11)
北海道		有江 幹男	高向 巖	熊本 信夫 小柳 知彦 関口 恭毅	曾野 和明
東北		青木 茂之 仁科 雄一郎		高橋 剛夫 (Vacant) 佐々木 肇	佐々木 公明
東京	(最高顧問) 大河原 良雄 渡邊 宏	(理事長) 寶来 豊英 (副理事長) 原田 敬美 内古閑 俊二 佐藤 満秋 飯野 正子 金田 新 石原 直紀 藤田 幸雄	舟橋 定之	太田 隆次 早川 与志子 長坂 健二郎 和田 昭穂	(審査委員長) 五十嵐 武士 印南 一路
中部		木下 宗七		千田 純一 上田 慶一	藤本 博
北陸		藤原 哲也		森田 幸夫	橋爪 祐美
京滋	(最高顧問) 岡本 道雄	細谷 正宏 清澤 悟 牧野 信夫 松田 武		岩山 太次郎	千葉 哲郎
大阪	金辻 信弘	木村 榮一 天津 章		大津留 智恵子	山藤 泰
中国		太田 英章			木村 榮一
四国		稲垣 今里 良典 滋		戸澤 健次 林 弘子 落合 太郎 西田 昭彦	高橋 勤
九州			吉村 徳重	川満 敏 尚 弘子 石川 博三	瀬名波 榮喜
沖縄		比嘉 幹郎 東江 康治			



## ガリオア・フルブライト同窓会の活動

### フルブライト中部同窓会

星野 靖雄 (会長)

1981 Rutgers U.  
1990 U. of Missouri

中部同窓会会長 愛知大学大学院教授・  
筑波大学名誉教授

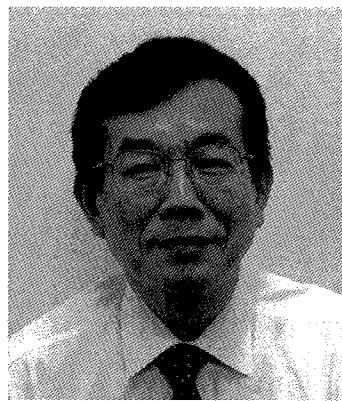
フルブライト中部同窓会は本年度より、同窓会活動を広く知っていただくために東京フルブライト・アソシエーションに続いて日本語でのホームページを開設している。また、我が国のフルブライト同窓会として初めて英文でのホームページも同時に開設している。さらに、本年度より、東京、北陸の同窓会に続いてガリオア・フルブライト中部同窓会よりフルブライト中部同窓会に名称変更している。ホームページには、中部同窓会の会報である“The Fulbrighter in Chubu”の第1号より第19号まで掲載しているし、東京フルブライトの会報“NEWS LETTER”をもNo.1からNo.21まで掲載している。英文版のホームページは、基本的には日本語版のホームページに掲載された文章のうちで英文のものを抽出することにより作成している。日本語版の英訳ではないのである。日本語版の内容の英文で書かれたものの一部であり、PDFファイルの一部を取り出すという抽出作業により作成している。これにより、日本語がわからない外国人にも抵抗なく理解できるのである。日本語のHPには、会則、役員、入会申込書、連絡先、会報、リンクのほかに「お知らせ」があり、最近の活動状況が掲載されている。2009年5月30日(土)には、総会開催と同日に筆者と同じ2度のフルブライターである今光廣一愛知学院大学商学部名誉教授による「アメリカの常識・日本の常識」の特別講演会を開催した。この講演会は、筆者がやはり会長をしているイーストウェストセンター\*中部同友会と共催であり、懇親会も共催とし、参加者数、費用等の面で合理化している。さらに、特別講演会は一般の市民にも参加費無料で、新聞の催し欄にも無料で掲載してもらい広く公開している。そして、講演内容はHPに講演者の検閲後ただちに掲載している。年1回の会報より早く公開され

るのである。この共催方式は、2008年の愛知教育大学へのフルブライト招聘講師であったCheryl E. Drought ニューヨーク州立大学・フレドニア校教授の特別講演を、フルブライト中部同窓会が経営行動科学学会中部部会と共催し、その“American Higher Education Administration”についての講演内容は同学会の機関誌「Japanese Journal of Administrative Science (経営行動科学)」Vol.21 No.3, pp. 275-279にも掲載されており、誰でも外部から自由に閲覧、保存できるようにしている。

(注)\*1960年米国議会により設立された米国・アジア・太平洋の人々と国家の相互理解のための共同研究・教育・対話のためのセンター。ハワイ大学に本部がある。

(参考文献)

フルブライト中部同窓会ホームページ：  
<http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/Fulbright.html>  
日本イーストウェストセンター中部同友会ホームページ：  
<http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/EWC.html>  
経営行動科学学会ホームページ：  
<http://www.soc.nii.ac.jp/jaas2/>  
East-West Center HP：  
<http://www.eastwestcenter.org/about-ewc/>

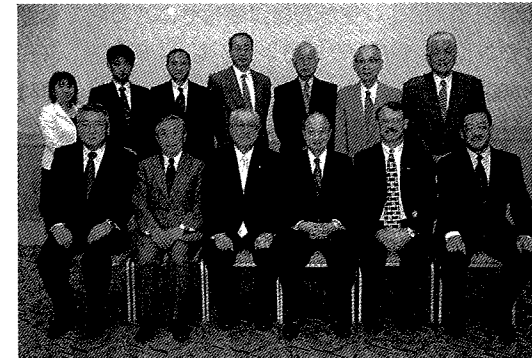


星野 靖雄 会長

### ガリオア・フルブライト四国同窓会 総会 報告

ガリオア・フルブライト四国同窓会会長 太田 英章

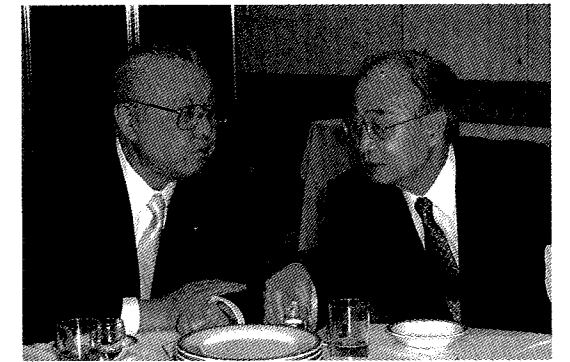
1956 U. of Virginia



2009年11月12日(木)、高松市の全日空ホテルクレメント高松に於いて3年振りの総会を開催しました。東京から日米教育委員会事務局長のDavid H. Satterwhite氏及び同窓会担当スペシャリストの伊藤智章氏が出席され、四国地区からは、池内武、井上貴照、北川博敏、佐藤洋一、芝田征二、東原邦彦、藤川勝、横井義則、三木吉治、太田英章及び事務担当の河野由美子ら総員13名でした。

総会では、Satterwhite 事務局長からは、ガリオア・フルブライト日本同窓会の現状や将来の方針など詳しくお話をいただきました。

今回の総会にはフルブライト同窓生でもある元国連事務次長・明石康氏が参加され、錦上に花を添えました。当日たまたま香川大学創立60周年記念講演会の講師として「大学の国際化」についてSpeechをされた明石氏は、国連を舞台に40年以上に亘って活躍された豊富な国際体験、殊にカンボジアやスリランカなど難しい紛争解決に尽力された話のほか——最近の日本の若者は内向きな志向が強くなり、危ないことにはチャレンジせず、あまり海外に



出て行きたがらない傾向があるのは心配だ。日本人はもっと英語をものにしなければいけない。完璧主義、シャイな性格から引っ込み思案になっているのは、少々おかしな英語でも平気でしゃべりまくる中国人や韓国人に負けてしまう。国際的交渉力は自分からの発信力も大切だが、それより相手の考えを聞くこと、相手が望むことを察知する能力が大切だ。

大学は入学は易しいが卒業するのが難しい欧米型に変えなければならない。いくら勉強が良くできても、社会へ出ればすべて応用問題だ。自分で考える力を養わないと切り拓いていけない。

日本は、和を以て尊しと為すと言うが、中国の論語では和して同ぜずと言う。人間関係、交渉術としては中国人の方が上ではなからうか。——などなどたくさんの有益なお話を聞かせていただきました。



その夜の歓迎晩餐会は明石氏を囲み、非常に盛大かつ賑やかな雰囲気、和気あいあいの内に話に花が咲き、香川大学一井学長及び大勢の大学職員とジョイントで夕食会をして本当に良かったと思います。

四国地区同窓会には一応55名の会員がいますが、その内例年会費を納入して下さっている方々は約半数の27名くらい、そして総会に出席されるのは10名前後と少々淋しい現状です。

同窓会も会員の高齢化が進み、多少停滞気味ですが、今後は若い世代の会員が中心となって活性化していくよう努力したいと考えております。

# 第34回日米交流チャリティ・ゴルフ大会

外池 滋生 ホスピタリティ委員会副委員長 1990 M.I.T.

今年も恒例の日米交流チャリティ・ゴルフ大会が10月19日戸塚カントリー倶楽部において行われた。前年度の大会ではリーマンショックの影響もあってか、参加者が少なめであった心配されたが、今回は企業の参加がやや少なかったが、個人の参加は前年を上回り151名であった。決して景気がそれほどよくなっているとは言えない状況で、参加者が増えたことは長坂会長をはじめとして実行委員会の努力の賜物であろう。

当日は天気にも恵まれ、気温も20度前後と暖かく、風もほとんどない絶好のゴルフ日和であった。西コース、東コースに別れて順次スタートした。トーナメント・コーディネーターの伊藤さん（日米教育委員会）の計らいであろう、多くの方が昨年回ったコースとはことなるコースに割当てられていたようである。

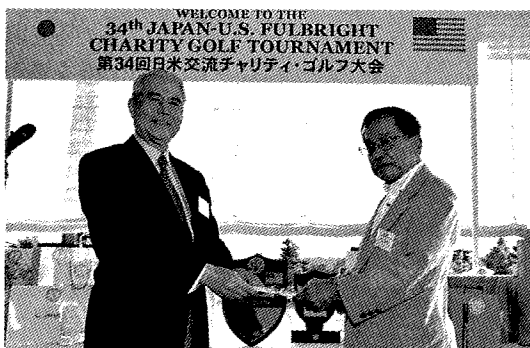
今年の参加者について特筆すべきは、チャリティ・ゴルフ大会の創設者の一人でもあり、長く日米教育委員会事務局長を勤められ、フルブライト対外奨学金委員会（J. William Fulbright Foreign Scholarship Board）の委員長もされたカロライン A. 又野・ヤン（Caroline Matano Yang）さんが、台湾からわざわざ参加されたことである。昔を懐かしむ人の輪が彼女の周りから絶えなかった。

さて、それぞれに楽しいラウンドを終え、お風呂で汗を流して、ラウンジであちこちに旧交を温める談笑の中で参加者がくつろぐうちに、いよいよ午後3時45分にパーティーが始まった。トーナメント・ディレクターのDavid Satterwhite氏の司会で、今年がフルブライト・プログラムの57年目にあたり、チャリティ・ゴルフが始まって28年目にあたるという日本語と英語を交えた報告を含めた開会宣言の後、行天豊雄大会実行委員長の挨拶と実行委員の紹介、同じく行天委員長からの紹介で小田美岐プロの挨拶があり、次回には小田美岐貸し切りのラウンドレッスンを賞品として提供したいという申し出があった。（是非来年は期待しましょう。）続いて米国大使館のRodney S. Tanaka氏によるJohn V. Roos駐日米国大使からのメッセージ代読の後、フルブライト同窓会の長坂健二郎会長より、このように民間が

基金を集めてプログラムに貢献しているのは日本だけでなく、この大会だけで米国からの留学生一人分、約400万円の寄付が集まった。そして、本大会の利益分の目録は日米教育交流振興財団の賀来景英理事長に晴れて手渡された。

その後今回のスポンサーへの謝辞、戸塚カントリー倶楽部とボランティアスタッフへの謝辞などの後、いよいよオークションが始まった。United Airlinesの日本とアメリカ往復のFirst Class航空券二人分が130万円で競り落とされたのが最高額であったが、無事全てのオークション提供品が競り落とされ、その後成績発表に移った。内閣総理大臣杯は東コースの優勝者Roy Vomastekさん（34, 35, Gross 69, Net 69）、駐日米国大使楯は、西コースの優勝者小原健司さん（36, 39, Gross 75, Net 71.4）であった。

オークションと表彰式の興奮がまだ覚めやらぬ4時45分頃、突然それまでまぶしい夕日を遮っていたカーテンが一斉に巻き上げられた。その向こうには夕焼空に沈み行く夕日と、左後方から夕日を受けた、富士山のシルエットがくっきりと浮かび上がった。



ていた。山頂の影が富士山頂の左端から、右側に長くのびる光景は、たまに新幹線からしか富士山にお目にかからない多くの参加者には思いがけないプレゼントで、しばしその光景に見とれたのであった。この光景は今回参加者の脳裏に刻まれて、何度も思い起こされることであろう。

ひとしきり夕日に映える富士山を堪能したところで、お開きとなり、参加者はお互いの健闘をたたえ合い、再会を誓って、それぞれの賞品とお土産を手薄暮の中帰途についたのであった。

来年は10月18日の予定である。



## 2009年度 アメリカン・ニューグランティ―歓迎会

2009年11月6日 午後6時～8時  
大手町サンケイプラザ

今年もアメリカから来日したニューグランティ―を迎えて、盛大な歓迎会が行われた。ホスピタリティ委員会長の島田道子委員長が司会として開会の挨拶。主催者の東京フルブライト・アソシエーションから長坂健二郎会長が立って、歓迎の言葉を述べた。

司会から来賓の紹介があり、アメリカ大使館や外務省、日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）関係のトヨタ自動車、三菱金曜会、全日本空輸などの方々が手を挙げて挨拶された。

「今日は特別にご紹介したい方がいらっしやって

います」と言って島田さんが、江端貴子さんの名を呼んだ。1990年度、MITに留学された同窓生で、今年の総選挙に民主党から立候補し、見事東京10区で当選を果たして注目された新人衆議院議員である。

緒方四十郎氏（1954年 Tufts U.）が乾杯のグラスを挙げ、歓談へ。ディナーの皿をとりながら、よく食べ、よく飲み、よく語る。演壇横のボードには2009年度のフルブライト・アソシエーションの活動リストが掲げられ、写真が展示されている。チャリティ・ゴルフ大会、原文人氏による総会講演会、国会と最高裁へのツアー、そして終わったばかりのフルブライト・アソシエーション世界大会（ワシントンDC）の写真もある。

フルブライト・ジャパン交流マネージャー岩田瑞穂さんによる、今年のニューグランティ―の紹介があった。一人一人壇上に上がって、短い自己紹介スピーチをする。

レクチャーとして来日しているパッド・コールマンさんはコロラド大学から来て、早稲田大学と共立女子大学でアメリカの文化・芸術・音楽・演劇などを教えている。文化地理学という独特な分野に興味深い。「パートナーのロブ・ベインです」と横に立つ男性を紹介。アメリカではこういうパートナー関係は普通のことなのだろう。

ジュディス・パスコーさんは夫のペリー・ハウエルさんと登壇。津田塾大学と日本女子大学でアメリカ文学を教える。中学生、高校生のお嬢さんは普通の日本の学校に通っているようだ。

ポール・スラシックさんは妻のスーザンさん、子供二人と滞日中。子供たちがさっそく新型インフルエンザにかかって大変だったらしい。オハイオ州のヤングスタウン州立大学から来て、東京大学と上智大学で政治学を講ずる。

ブルース・レヴィンさんは建築学を工学院大学で教えているが、日常生活では狭い日本式アパートで暮らし、それも建築学的に興味があるようだ。

次にリサーチャーとして来日しているベトリス・フラワーズさん。夫のケヴィン・ワシントンさんと立つ。ハワイ大学所属で、現在は法政大学で「人身売買」の研究をしているという。いま日本で人身売買があるのか否か。昔はたしかにあったのだが。

フリーランスのジャーナリストであるページ・フェラーリさんは、「セレブリティ―」の分野に興味があり、上智大学に所属して研究を始めたが、日本にアメリカで言う「セレブ」がいるのか、いないのか。で、いまは「スキキャンダル」の研究をしています。たとえばのりピーとか。皆さんももしスキキャンダル



に巻き込まれたら、ぜひ私に取材させてください。

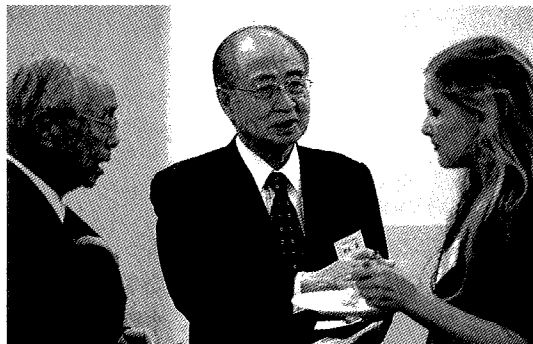
博士課程で早稲田大学にいるダニエル・サリバンさんは日本の明治文学——山田美妙や高山樗牛といった人の作品を、「現代日本文学の源流として重要」と位置づけている。

アジア系のメイ・トランさんはシカゴ大学を卒業したてで、フルブライト・フェローとして埼玉県の理化学研究所で脳化学、発生生物学などをテーマに研究中。同じくフェローのキートン・ホワイトさんは愛知大学で日本のテレビゲーム市場について研究中だ。

ワシントンDCで行われた世界総会に出席し、帰国したばかりの福田学さん（1984年 American U.）と岡美織さん（2006年 Harvard U.）が各国フルブライトの交流について報告。

「中締め」の音頭はいつもの原田敬美さん（1974年 Rice U.）。「日本人は奥ゆかしいから、会の終りも closing ではなく、middle clap です。そのやり方をお教えしましょう。3・3・3・1と手を打ってください。これは3・3・3で9ですね。これに1を足すと10ですが、漢字では〇となります。すべて円満になるように、では、みなさん、お手を拝借。ヨーッ、チャンチャンチャン……！」

にぎやかに開きとなった。



## 秋の鎌倉を歩く会

松尾 秀助

1977 American U.

「少年時代、母に連れられて鎌倉を訪れ、平和や静けさをたたえた大仏を見上げた。子供の私は抹茶アイスクリームにより魅せられた」

来日したオバマ大統領のユーモアあふれるスピーチが話題になったが、恒例の鎌倉ツアーが今年最後の連休最終日、11月23日に行われた。快晴無風、小春日和に恵まれて、アメリカン・グランティーとその家族13人、日本側が29人、合計42人というこれまでにない大人数の部隊となった。

午後1時、横須賀線北鎌倉駅前に集合。先頭の緑の三角小旗を目印に、いざ出発。みんな赤いリボンをつけている。まずは目の前の円覚寺へ。300円払って、臨済宗円覚寺派大本山の境内に入る。鎌倉幕府第8代執権、北条時宗が1282年に創建した禅寺。鎌倉五山の一つに数えられる。

「夏目漱石も明治27年に参禅したそうですよ」との説明に、アメリカン・グランティーたちも、「ああ、あのソーセキがね」と歴史を感じさせる建物を見上げる。何人かは少し離れた北条時宗公の御廟所まで足を伸ばした。

自由行動ののち、山門前に集合すると、もう行方不明者がいる。知らないおばさんが、「同じ赤いリボンをつけた方がお二人、入口のところにいらっしゃいましたよ」と教えてくれた。無事、合流して、総門の石段を下る。両側のモミジがきれいに色づいて、絶好の記念撮影ポイントになって、大混雑。

線路沿いに歩き、左の明月院通りに入る。「世界ユネスコ協会」がバザーをやっている。絵本作家の葉祥明美術館を過ぎると、もう明月院だ。別名あじさい寺。四季それぞれに時々の花が咲く。歩いている石の参道は梅雨時にはあじさいの花が咲き乱れる。秋と冬のはざまの今は、モミジの紅葉と早咲きのスイセンの黄、サザンカの赤。

思いがけなく、寺の関係者に呼び止められて、同窓生の明石康さん（1955 U. of Virginia 元国連事務次長）がわれわれのために頼んでおいてくれたことが判明。「方丈」と書かれた本堂に上がって、ご本尊・聖観世音菩薩の前で明石さんの友人という寺僧さんのお話を聴く。外池滋生さん（1990 MIT.）とキャサリン・テグマイヤーさん（St. Olaf College 東大）が通訳。かつてここは大寺院だったが、明治初年、

廃寺となり、支院の明月院だけが残ったという。

方丈前の枯山水庭園は須弥山をかたどり、仏教観を表現しているとか。グランティーたちはさかんに写真を撮る。「鎌倉十井の一」という「瓶の井（別名つるべの井）」や岩屋の墓所「明月院やぐら」を見て、辞す。

とにかくこの日の鎌倉は人も車も多かった。緑の三角小旗がないと、はぐれてしまいそう。せんべいを焼く匂いと、排気ガスのにおいを等分に嗅ぎながら、鎌倉街道を建長寺へと行進する。

建長寺は鎌倉五山の第一位。グランティーたちは巨大な三門を見上げ、扁額に大書された「建長興國禪寺」の意味を問う。物識りの長老同窓生が説明する。三門の横に小ぶりだが、茅葺き屋根の鐘楼がある。重さ2.7トンの梵鐘は国宝で、1255年に時の執権・北条時頼公が発願し、関東鋳物師の長・物部重光が鑄造した、と説明書にある。750年も前にこれだけのものを造る当時の技術にグランティーたちも感服の体。

法堂（はっとう）の天井画「雲龍図」は創建750年記念に小泉淳作画伯が描いたもの。この寺も数々の文人たちが住まったり参禅したりして、その作品中に取り入れている。鎌倉文学館ではその詳細が見られるし、相模湾を見下ろす眺望もすばらしいが、今回はそこへ行く時間はない。

巨福呂坂を下って、一路鶴岡八幡宮へと向かう。山に囲まれた鎌倉の日没は早い。ぐっと冷えてきた空気に、みんな襟元をしめなおす。ただ、子供たち



は元気で、テグマイヤーさんの子供、イヴァンとリアの兄妹は薄着でも平気で歩いている。

八幡宮西門から入ると、すぐ本宮になる。大混雑の参詣客に混じって、七五三の子供たちが着飾って本宮内でお祓いを受けている。そのかわいい姿にグランティーたちはカメラを向ける。七五三やざらりと並ぶ絵馬札について、同窓生たちが説明している。丑年の今年の絵馬は牛の絵。「希望の大学に合格できますように」「二人が一生一緒に幸せでいられますように」というものに混じって、「早く借金が返せますように」という世相がらみの願い事もある。

石段を下る。七五三で正装した三歳児が親に手を引かれて上ってくるが、履ききれない草履が脱げて大変。下の舞殿では婚儀祭礼が行われている。「越天楽」を奏でる笙箏の奏楽を先頭に、巫女さんに導かれた新郎新婦が親戚一同とともに舞殿に上がる。衆人環視の中での婚儀ははずかしさろすが、誇らしくもあるだろう。

芋洗い状態の小町通りを抜けて、宴会場の「和民」4階へ上がる。よく歩いた後のビールはうまい。賀来景英さん（1968 U. of Chicago）の音頭で乾杯。今年ツアーには越守丈太郎さん（2007 Georgetown U.）はじめ、岡美織さん（2006 Harvard U.）、井上陽子さん（2007 Harvard U.）と若いフルブライト同窓生が参加してくれたことが特筆される。明日の同窓会活動の活力になってくれることを願う。

今年、なぜこんなに大人数になったのか、大野熙TFA事務局長が分析したところ、どうも大野さんが書いた、「最後の宴会で大盛り上がり！」という惹句が効いたらしい。2500円の会費にしては、飲み放題、料理も結構。ちゃんと事務局長は計算していて、見事収支はつぐなったらしい。5時から7時の制限時間はあっという間に終わって、大満足の一行は鎌倉駅からそれぞれの家路についたのであった。





## 国会および最高裁判所見学

島田 道子 ホスピタリティ委員長  
1957 U. of Minnesota

5月19日、9時にJUSECに、アメリカングランティ7名、同窓会側6名、総勢13名が集合し、国会議事堂の裏側にある第二議員会館へタクシーで向かった。入口では秘書の毛利智美さんが迎えて下さり、会議室に誘導して下さいました。津島雄二議員（1955 Syracuse U.）がすぐいらして、さっそく日本議会制度について、流暢なブリティッシュ・アクセントの英語で説明して下さいました。日本の二院制議会は、アメリカのそれよりも英国のシステムにより似ていることなど。その後の質問にも丁寧に答えられていた。今思うと、津島議員は夏に引退を宣言なされたので、これが最後の会見となった。皆で記念撮影をした後、国会議事堂へ場所を移した。

正面に向かって左側にある衆議院議場へ行き、二階の外交官傍聴席で国会の機能、議員の機能、国会議員の地位などの説明を受け、その後中央玄関、中央広間、天皇の御休所、皇族控室、登院表示盤などを見学した。

議事堂の外へ出て、建物を背景に記念撮影をした。その後分散してJUSECへ戻り、昼食のサンドイッチをみんなで一緒に食べた。

最高裁の訪問時間が、判事のご都合で午後3時半からなので、それまでの間、アメリカングランティとJUSECでいろいろなことを話し合った。日本での生活上の問題など、活発なディスカッションになった。

分散して再びタクシーで最高裁判所へ向かい、最高裁の玄関で事務局秘書課の石塚氏の出迎えを受けた。さっそく小法廷へ行き、堀籠判事によって三権分立による最高裁の機能の説明を受けた。日本語での説明だったので、大野事務局長が通訳をして下さった。

一応の説明の後、堀籠判事の御好意で、グランティの希望者に、法衣をまとい、裁判長席に座って写真撮影をすることになったら、全員が希望し、大いにもりあがり、大喜びだった。最高裁の見学そのものが難しいのに、こんなことまでしてもらい、大変ラッキーだと大いに喜んでた。その後、場所を移し、ビデオをみながら「司法権の独立と三権分立」が憲法によって定められていること、裁判所の組織——最高裁の下に高等裁判所があり、その下に家庭

裁判所と地方裁判所があり、さらにその下に簡易裁判所があることなどの説明を受けた。

全員非常によろこんで、満足した一日だったので、私共も大変うれしかった。



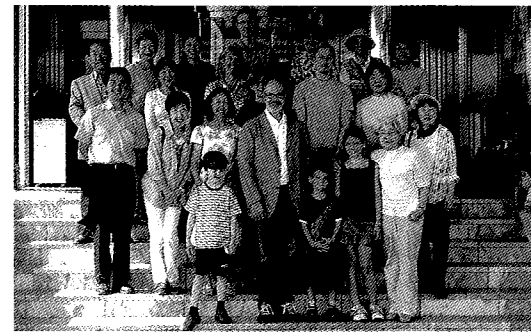
## 宇都宮・日光旅行

山田 真之 ホスピタリティ副委員長  
1976 Georgetown U.

毎年の恒例となっている宇都宮・日光ツアーが今年も行われた。「海の日」を入れた3連休初日の7月18日、米国よりのフルブライトグランティ及びその家族等合わせ15名がJR宇都宮駅に集合した。宇都宮に本拠を置く国際交流ボランティア組織「いっくら会」の長門会長以下メンバーの方々が温かく出迎えてくれた。フルブライトグランティ参加者全員の集合を確認し、栃木県国際交流協会へバスで直行した。国際交流協会で、ツアー参加のフルブライトグランティ一人ひとりを紹介し、各々フルブライトグランティは宇都宮市長からの「国際親善市民証」を受け取った。国際交流センター鈴木事務局長の発声で乾杯、ボランティアの人々の手作りの食事によるウェルカム・ランチョンを楽しんだ。

ウェルカム・ランチョン後バスで移動。裏千家茶道教室教授斎藤宗啄氏宅を訪問した。純日本建築の素晴らしい茶室へ案内され、茶道の作法、作法の背景、日本文化の美等色々興味深い話を伺った。お手前の基本の手ほどきも受け、お菓子と共に美味しい抹茶を味わった。別室に移り、斎藤宗啄氏のご夫人である藤間流名取の藤間章喜満さんより、日本舞踊の紹介を受け、優雅に日本舞踊を舞っても戴いた。茶道、舞踊と日本文化理解の旅の良きスタートとなった。

ホームステイは今回の宇都宮・日光ツアーの重要



栃木県国際親善市民証をもらって記念撮影

なイベントであったが、ホストファミリーの集合場所となった「コンセーレ」にバスで行き、ホストファミリーの方々とお会いした。フルブライトグランティが各々のホストファミリーに紹介され、日本人家庭でのホームステイを楽しむため、車でそれぞれの家庭へと向かった。

19日の朝ホームステイ先の方々の運転で留学生が「コンセーレ」に集合。バスで那須烏山市を訪問し、和紙製造工場「烏山和紙」を見学。烏山地方は日本でも有数の和紙生産地であったが、現在はこの工場一軒のみが伝統を守っているとの事であった。1300年の歴史を誇る漉し和紙の制作を体験。実際に和紙製はがきを手作りした。この工場にはオーストラリアより版画家イングリッドさんが研修生として来ており、フルブライトグランティに自分の体験を含めた漉し和紙の詳しい説明もあり、充実した作業となった。手作りの葉書を数時間後に仕上げ、昼食先まで届けて戴き、旅の楽しい思い出として「手作りはがき」を各自持ち帰る事が出来た。



烏山和紙の工場ではがき作り

昼食は蕎麦打ちの実演付きの楽しい食事であった。見事な手さばきで蕎麦が出来上がり、その出来上がった蕎麦をそのまま茹で上げ、揚げたての天ぷらと共に味わう素晴らしいものであり、留学生も非常に喜んでた。大谷範雄・那須烏山市長も同席戴き、フルブライトグランティに温かい歓迎の挨拶も戴いた。同市訪問のバスを無料提供戴く等お世話になった。

その後、地元で有名な「山あげ会館」を訪問。400年続き、重要文化財ともなっている「山あげ祭り」が7月24～26日に予定されており、町のあちこちに提灯が吊るされる等その準備が進んでいた。その歴史・祭りの状況等をビデオで見、祭りで使われる「だんじり」等も見学し、昔から続いている地方の文化の一端を楽しませて戴いた。

日本酒「東力士」の製造工場をも見学。太平洋戦争前に戦車を製造する為に作られたと言う縦・横数百メートルに伸び、蝙蝠が飛び交う洞窟があった。その洞窟の中の温度がひんやりと一定している事を利用して、日本酒が寝かされ25年もの日本酒等が製造されていた。フルブライトグランティも美酒を味わった。

20日の朝、2日間お世話になったホストファミリーの方々に送られてコンセーレに到着。別れを惜しむ光景があちこちで見られた。ホームステイ先の人たちとの「さようなら」の後、一行は日光の「いろは坂」で美しい景色を楽しみ、華厳の滝に到着。昨年は霧の中で滝の音だけで終わった華厳の滝も、今年は天気にも恵まれ、素晴らしい滝の眺めを満喫出来た。

昼食は日光聖橋近くの粋なお好み焼き屋に行った。各々の好みに合わせ上手に焼き上げながら、会話も大いに弾んでいた。

その後、世界遺産にもなっている東照宮を訪問。陽明門等日本の伝統的な建築物をカメラに収めながら、ゆっくりと世界遺産を見学した。見学後、バスで東部日光駅迄行き、楽しかった宇都宮・日光ツアーを振り返りながら、今後の日本での留学の成功を誓い合いながらの解散となった。今回のツアーは日本文化の理解、日本人との交流のより良い機会を与えてくれたと、フルブライトグランティよりの謝意も届けられており、関係者の方々に改めて御礼申し上げます。



山あげ会館で地方文化の一端を見学

## セミナー(勉強会)報告

### 第16回セミナー

09年1月16日

#### オバマ政権下の中東情勢を予測する



定森 大治

1973 Columbia U.

#### 【中東の現況】

1991年の湾岸戦争はイラク対多国籍軍でアメリカの単独行動ではなかった。2001年の9・11同時多発テロによってアフガニスタン攻撃を開始し、2003年のイラク戦争に至った。ブッシュ政権にとって大きな誤算となったのが、ヨーロッパなどの国々が意外にも参戦に及び腰だったことだ。そのためにアメリカの単独行動的な印象が強くなってしまった。

これまでボックス・アメリカナが有効だった時代に通用していた平和構築のモデルは、もはや不可能になった。「テロとの戦い」というブッシュ政権の大義名分も、「テロとは何か」ということの再定義が必要になった。

#### 【地域別政策】

●パレスチナ オバマ政権はイスラエルとアラブ側に対して、公正な仲介者として関与できるかどうか。オバマ政権に求められるのは、「constructive engagement」だろう。日本政府には、「Jerico計画」というものがある。ヨルダン川沿いのエリコに農業拠点をつくり、パレスチナ人が作った産物をヨルダン経由で世界に供給する。イスラエルはマージンを得る。両者共存のプログラムで、このような建設的な関与を進めていくことによって、平和が構築されるのが望ましいが、現状ではその可能性は低い。

●イラク この国に親米国家をつくらうというブッシュ政権の構想は放棄せざるを得ない状況だ。オバマ政権になって、いずれ米軍は撤退することにな

元朝日新聞・カイロ特派員、ワシントン特派員、論説委員。現在は日本とエジプトに年間半々ずつ住む。早稲田大学講師

ろうが、その後のイラク周辺での軍事プレゼンスをどう再構築するか課題となる。

●アフガニスタン この国は国家としての体を成していない。そういう破綻国家にどう関与するかが問題。ブッシュ大統領は同時多発テロの犯人であるアルカイダ、それを匿うタリバーン勢力の潰滅を目指してアフガンに進攻したが、成果が上げられない。オバマ政権も米軍を増派せざるを得ないだろう。

●イラン 中東地域での大国になったイランは今中国を近代化のモデルと考えている。全体主義という非現代的な体制を保持しつつ、経済的な発展をとげるといふモデルだ。アメリカはそれに対する建設的な関与へと政策を転換できるかが勝負だろう。

●湾岸アラブ(サウジアラビア) これまで石油によって得た富の一部を国民にばらまくことで安定と繁栄を保持してきた。しかし、石油資源の枯渇が予想されるこれからは、脱石油の近代国家に脱皮できるかどうか問題だ。カタールは開明的な指導者がいて、日本をモデルとして近代化を目指している。オバマ政権になったアメリカの中東政策に対して、日本はどのような協力体制をとるべきか? アーミテージが言っている「Boots on the ground」というのは、どんなbootsでもいい、military bootsでなくても、NGOでもJICAでも、あるいはbusiness bootsでもいいから、とにかく積極的にコミットしてほしい、ということだ。

### 第17回セミナー

09年5月13日

#### 世界金融危機の構図と対応



中尾 武彦

中尾氏は財務省切っの米国通である。今回の金融危機に見舞われ、相次ぐ主要国国際会議に全部出

現・財務省国際局長、56年大阪府生まれ。東京大経済卒業、UCバークレー校経営学修士終了。大蔵省入省、国際金融局、主計局などを経て、在米大使館公使を歴任。

席している日本の代表である。3度に及ぶ数年間毎の米国駐在で生活実感からも裏打ちされた外交官、行政官としての該博な知見は準備してもらった22頁の資料、2枚のレジユメからあふれていた。

冒頭、今回の米国での金融危機対応は当初日本の轍を踏まないとのふれこみで始まった。しかし、危機の進行スピードの速さ、金融派生商品の複雑性、国境を越えたひろがり、EUへの伝播、底がみえない深さ、広範性に対応は困難を極め、対応スピードのみに米国らしさをみせている。一連の国際会議は続々と開催されている。米国、EUとの差は、EUはそれぞれの政府が金融、保険、中央銀行の監督権を所有しており、伝統的な自動安定化装置への信頼等、米国と同一にはいかない。しかし、基本姿勢の市場原理、市場機能の重要性尊重はつらぬかれている。

途上国支援でも、IMF、世銀、アジア開発銀行の活用、更に2国間支援、貿易金融の分野での信用機関、保険を充実等の促進、の課題を連携して促進する方向を目指している。

今までのところ、機軸通貨としてのドルへの信認は保たれており、米国債の金利、為替レートも危惧されたようなことはない。政府財政赤字拡大、FRBのバランスシートの悪化も容認されて推移をみている。今後、金融機関のローンの不良化はどこまでか、住宅価格の低下はどこまで下げ止まるか、家計消費の下方調整の動向、自動車産業の対応等の諸問題が見守られることになる。

日本の対応は、金融セクターへの直接ダメージは欧米に比して少なかった、自動車、IT、機械などの先進的な製造業の製品にたいする世界の需要が大幅にダウンし、内需も影響を受けて、生産・雇用も大打撃を受けた。政府の大幅な政策的テコ入れ、中国の成長にあやかった持続的需要により各産業とも浮揚を目指す中で、単に従来のパターンをなぞるだけでなく、より改善された企業がバナンス、日本ならではの新機軸、こだわり、労使共々の高次元の労働倫理を構築していくべきである。新イノベーションが、革新的にリスクをとり、従来の集団集中力プラス、個人の場も生かすべきである。多様な人材、外国人、女性、高齢者が活躍する社会をめざすべきである。

話の中に、ローマの会議で、話題をまいた大臣の随員「4悪人」の一人として、週刊誌の写真に載る光栄に浴したという、セミナー出席者全員の爆笑をよんだ、ユーモアのオチも特筆しておきたい。

(文責 大野 照)

### 第18回セミナー

09年6月26日

#### 日本観・世界観・わたくし観



千野 境子

1978 George Peabody C.

U. of California, Davis

サンケイ新聞外信部、マニラ、ニューヨーク支局に勤務の後、外信部長。シンガポール支局長、大阪特派員を務め、論説委員長に。

私は女性特派員としては草分けになるかもしれませんが。1988年にマニラに派遣されたのが最初。三井物産の若王子支店長が誘拐され安否不明の時、社内では「危ない所に女性を派遣して、もしものことがあったらどうする?」との声もあったようです。

90年~93年にニューヨーク特派員。父・ブッシュの時代です。アメリカは経済的に疲弊し、日本マネーがロックフェラー・センターや有名ゴルフ場を買収していました。でも同時に経済は再び強くなる準備過程にもありました。仕事は大別して①ウォールストリートの経済、②国連、③広く社会・文化の3つですが、金融危機だけは起きませんようにと祈る思いでした。幸い神様は聞いてくれたようです。

90年2月に赴任して、7月に日系のフジモリ大統領の連載企画でペルーに飛びました。ところが8月2日にイラクがクウェートに侵攻し、その後はもう国連報道に没頭です。冷戦の終結で安保理も機能し、国連に光が当てられた時期ですが、93年のユーゴ紛争の頃になると、内戦問題の深刻さと複雑さで活動も難しくなっていました。それでも当時のデクエアル事務総長が、「国連はLast Resort (最後の頼みの綱)」と湾岸戦争の調停を最後まで諦めなかった姿は今も印象に残っています。次のガリ事務総長時代はPKOがたくさん作られ、日本もカンボジアに初めて自衛隊を派遣しました。事務総長特別代表になった明石康さんや難民問題の緒方貞子さんなど日本人の存在感が大きい時代でもありました。

帰国後は外信部長の後、再び特派員として96年から98年まで、今度はシンガポールへ行きました。

香港返還、タイ通貨下落からアジア通貨危機に発展し、シンガポールはアジアのハブ（拠点）でしたから、現場は楽しかった。そうした中でインドネシアのスハルト体制が崩壊します。なぜ32年も政権を掌握出来たのか、なぜ崩壊したのか、政権誕生の契機となった1965年の9・30クーデターに遡り調査報道をしました。アメリカCIA主導説、中国共産党説、スハルト陰謀説など、事件の真相は藪の中ですが、アジアの政治地図を変えた事件でした。

日本へ帰って、「世界は日本をどう伝えているか？」というコラムを10回連載したところ、結構反響があり、月々のコラムを書くようになりました。振り返ると、世界の中で日本はどうあるべきなのか、というコラムの問いが特派員時代も含めて今日までの私の記者としてのテーマであるように思います。それから産経新聞だけのポストですが、大阪からの独自の発信を増やすべく「大阪特派員」も2年半ほど。その後、東京に戻り論説委員長になりました。

フルブライトで行ったのは1978～79年ですが、短い期間にいろんな人と出会いました。これは宝です。そのとき感じたアメリカ観はその後、何度もアメリカに行きましたが、変わりません。オープンでフェアなフルブライト委員会に感謝しています。

## 第19回セミナー

09年10月29日

### 民主大勝・政権交代から来年の参院選まで



泉 宏

今日で政権交代選挙から2カ月。内閣発足時の平均支持率が75%というのは細川、小泉両政権と並ぶオバケ人気政権だ。鳩山さんの所信表明での「戦後行政の大掃除」「無血の平成維新」という表現や、国家戦略局とか右翼的な文言が多いのが気になるが、少なくとも鳩山さんは自分の言葉でしゃべろうとしている。50分以上の所信演説は異例。終わると民主党議員がスタンディング・オベーション。こ

れも異例だった。

補正予算は減額したが、概算要求は95兆円、事項要求を含めると98兆円にもなる。税収は落ち込むので赤字国債増発は必至。公約実現のための赤字国債発行と、赤字国債を発行しないで公約実現を見合わせるのと、どちらが支持率低下を小さくできるか、悩むところだろう。

沖縄基地問題も、マニフェストとの整合性が怪しい。アメリカからは早く決めろと言われ、その対応がいかに拙劣。日本郵政のトップ人事で元官僚の斎藤次郎さんを持ってきた亀井さんの電話に鳩山さんは「エッ？」と思っただろう。結局、小沢・斎藤 vs 小泉・西川という対決はこれから尾を引くだろう。

八ツ場ダム建設中止を宣言した前原国交相にしても、もう少しものの言い方があるだろう。あの人の目は政治家には珍しく澄んでいる。しかし、正しいことをただ正しいと言うのは政治家じゃない。長妻厚労相への期待度はダントツ一位で高かったが、閣議に遅刻するという椿事があり、これは一種の厚労省官僚のイジメかも。翌日から「貝になった」。ノイローゼかとも言われた。問題山積だ。

菅直人さんの国家戦略室は何もすることがない。「ダマ菅」「ブラ菅」といわれているが、どうもタナボタ待ちらしい。というのは鳩山さんの故人献金問題があるからだ。父親の代からやっている政治資金規正法上のウソ申告。自分の金だからいわゆる汚職じゃないと、東京地検は抑え気味。永田町の噂では、12月25日頃、予算編成でマスコミが騒いでいるときに「略式起訴、罰金」でけりをつけるんじゃないか、と。

いまの民主党は二重権力ではなく、小沢さんの一重権力だ。新人を集めた「小沢小学校」と呼ばれる研修会では、欠席者は懲罰の対象。誰一人小沢さんに反対できない。批判した人は無役になる。

一方の自民党はひどい。麻生さんがどれほど票を減らしたか。よくもこれだけオウソゴールを繰り返したものだ。次の参院選は来年の7月11日になる可能性が高い。民主はあと67議席とれば参院でも安定多数になる。現状ではその可能性もある。いまワイドショーやインターネット、2チャンネルなどで選挙は大きく変わった。でも、初めて国民が自ら選んだのだから、私は民主党にしっかりやってもらいたいと思う。そのためにも自民党が立ち直ってほしい。これからの政治日程の局面、局面で起こること、それが何のサインなのか、それを判断して政治を考えていただきたい。

## 東京フルブライト・アソシエーション沿革

1982	日本のフルブライト・プログラムの30周年を機に全国9地区（北海道・東北・東京・中部・京都/滋賀・大阪・中国・九州・沖縄）に、ガリオア（1949～51）を含めたガリオア・フルブライト同窓会を各地区ごとに結成 同窓生を対象に、主に米国人招聘の目的で第一回個人募金を展開し、4,400万円余りの寄付金が集まる。またその一環として日米交流チャリティー・ゴルフ大会も始まる。 フルブライト上院議員を招き、記念の昼食会
1983	経済団体・企業を対象とする募金開始 同窓会募金をもとにした奨学金による留学生受け入れ始まる。
1986	(財)日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）設立
1987	第二回個人募金により、4,600万円余りの寄付金が集まる。
1988	東京同窓会・懇親会（4/20）に、皇太子殿下(天皇)・妃殿下(皇后)がご臨席された。 北陸同窓会が結成される。
1990	フルブライト上院議員来日、『フルブライト夫妻歓迎会』を開催した。 東京同窓会主催で、新着米国人フルブライターの歓迎レセプションに、高円宮殿下・妃殿下がご臨席された。
1991	ニューヨークに『日米ガリオア・フルブライト同窓会』が結成される。
1992	日本のフルブライト・プログラムの40周年を記念し、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会、フルブライト記念財団の共催により、アメリカ再発見旅行、全国大会（9/18、天皇皇后ご臨席）、フルブライト賞授与、記念品販売、フルブライト記念音楽祭（10/13、皇太子殿下ご臨席）、記念出版などの行事が行われた。 第三回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
1995	1995年2月9日、フルブライト上院議員逝去
1996	四国同窓会が結成される。 世界のフルブライト・プログラムの50周年記念行事『アジア・シンポジウム』を日米教育委員会が開催し、シンポジウムとレセプションへ皇太子殿下(天皇)・妃殿下(皇后)がご臨席された。
1997	第四回個人募金により、約3,000万円の寄付金が集まる。
1999	2002年のフルブライト・プログラム50周年に向けて『フルブライト公開講演シリーズ』を開始 ガリオアプログラム50周年（1949～99）を祝い、『ガリオア50周年記念レセプション』を開く。
2001	第五回個人募金運動開始
2002	日米フルブライト・プログラム50周年を記念し、日米教育委員会、日米教育交流振興財団の共催により、記念切手発売（5/8）、フルブライト音楽祭5/9(木)、美術展示会（5/20-26）フルブライト公開講演シリーズ最終回（5/25）、レセプション（5/25、天皇・皇后両陛下ご臨席）、公開記念式典/フルブライト賞授与/シンポジウム（5/26皇太子・同妃殿下ご臨席）アメリカ再発見旅行（9/20-29、ボストン、ニューヨーク、ワシントンD.C.ほか）、記念品販売、記念出版などの行事が行われた。 第五回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
2004	会則を一部変更し、名称を「東京フルブライト・アソシエーション」に改めた。（5/26）
2005	フルブライト上院議員生誕100周年記念行事として、ハリエット・フルブライト夫人が来日、東京（10/29）、京都（11/1）、大阪（11/2）で歓迎会を開催した。
2006	フルブライト生誕100周年記念演奏会を開催した。（2/4） 「フルブライト生誕100周年募金」発起人会を開催した。（6/6）
2007	「フルブライト生誕100周年記念企業・団体および第六回個人募金」を実施 第六回個人募金により3,080万円余りの寄付金が集まる。
2008	「フルブライト生誕100周年記念企業・団体募金」最終報告とお礼の会を開催した。（6/5）
2009	2009年7月11日(土)、山王グランドビル地下から4Fへ移転。 〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル416 Tel: 03-3503-1841 Fax: 03-3503-0758 (Tel/Fax変更ナシ)

### ■■■■ ホストファミリー ■■■■

2009年度は、下記の同窓生方よりホストファミリーのお申し出をいただき、現在調整中です。

No.	氏名	留学年度	留学先
1	堀江 昭	1952	U. of Colorado
2	前田 典彦	1960	U. of Pennsylvania
3	小川 富由	1983	U. of California, Berkeley
4	小泉 成史	1984	M.I.T.
5	松島 たかね	1993	Columbia U.



大野 照 事務局長

1956 Northwestern U.

09年10月29日から11月1日まで行われました総会のご報告を申し上げます。

慣例のマディソン・ホテルで、第一日目は午後7時から10時まで、二組に分かれて始まりました。出席者は時間の関係か、少しまばらではありましたが、すぐに熱気溢れる雰囲気になりました。司会は昨年北京でも大活躍の Ms. Jenise Englund で最初に国務省の担当の Ms. Michael Kuban がスピーカーとなりました。簡潔に世界へのアメリカの交換学生への方針と実情説明がありました。ポイントは金額が増額になっているということでした。

翌30日は9時から、全体の責任者ジェーン・アンダーソンから、詳細にわたり全体の報告があり、来年のフルブライト世界大会はアルゼンチンのブエノスアイレスで開催との発表がありました。

昨日に続いて国務省の Marianne Craven, Managing Director, Office of Academic Programs, Bureau of Educational and Cultural Affairs, U.S. Department of State から報告があり、各国の代表、米国支部からの質問にしっかりした応答がありました。コーヒープレイクの後、昼食まで“Global Economic Challenges”の題の基に4名からなるパネルディスカッションがありました。楽観的な見通しの話が多く、世銀、ジョンズホプキンスの経済学教授は雑誌新聞でのオバマ政権流の特に特筆すべきものがない話でした。

昼食後、2時から3時15分まで、Roundtable Discussions Session 1があり、小生が提出して、選ばれた「Toward a low carbon society」のテーマの議長席に座りました。全部で、1ダースほどの他のテーブルに続々と参加者(自分で選ぶ)が着席するなかで、題が難しくあったせいか、なかなか人が集まらずウンザリ待っていました。するとジェーン・アンダーソンが何処からともなく現れて、呼び込みを始め、あっという間に定数となり、ジェーンも鋭い質問を皆に投げかけ、侃々諤々の会議となりました。日本は狭い土地に70%におよぶ森林を有している世界屈指の国ですが、米国を始め雨の少ない広い地域を持っている国はCO<sub>2</sub>対策に植林とい

ってもなかなかです。樹木の品種改良。太陽のおかげで太古の資源が石炭、石油となり今日の世界のエネルギーを支えているのですが、もう目一杯の人類の世界人口に到達しかかっている現在待たなしという共通の考えを全世界に貫徹していくということに全員今更ながら一致しました。折しも、鳩山総理大臣の25%カット宣言の話題もあり、先進国が率先して今進めている省炭酸ガスの開発技術の世界展開に邁進すべく努力するということでした。

晩は年次晩餐会で燃料省次官のジョンソン女史のスピーチがあり、日本のお役人とは全然違う剃刀のような言いたいことをずばずば胸のすく話でした。炭酸ガス解決技術の開発にはアメリカとしての意気込みが感じられました。

翌31日午前中は“Social Entrepreneurship-Inspiring & Implementing Change”のテーマの基でフルブライト同窓会の会長、Suzanne E. Siskelが司会をしました。スピーカーは、フォード財団、教授、ヘッジファンドから2名の4人でした。

アメリカでは、株主は神様であるかの考えの下に、ここ15年くらいの間に利益を上げることが至上であるということで、実績主義・刺激給で金融企業の一部では係長、課長で、年俸1億円になるケースが続々出現し、この度のリーマンショック、あわや世界経済恐慌の再来かという土壇場まできました。これに対するアンチテーゼとして、社会常識、通念から起業をする際の経営者の基本コンセプトで暴利に対する自制を理論として作り上げ、これをウリにする新しいヘッジファンドの紹介が長々とありました。Ashoka, Endeavor, Uhuruといった全く新しい考えのヘッジファンド手法がこれです。従来のあくど過ぎる金融業から如何に一線を画しているか、「Philanthorocapitilismとは何か?」、Socially Responsible Profitsの概念、利益の25%をdeveloping countries向けのチャリティに使う、と教祖的な提唱者、Peter Kellnerが熱っぽく説くのは強烈迫力でした。(彼は1992年Hungaryのフルブライト同窓生です。)日本でも原文人氏の説く「公益資本主義」などが出てきています。ともかく、さすがはアメリカだ、フルブライトの総会でこのような最新の流れに触れられると感激ひとしおでした。

その日31日昼食は恒例の正式昼食会で、Krishna Guhaさん(Financial Timesの米国代表)の有益な話がありました。

その日の夕方は、ワシントンの観光名所植物園で締めパーティがあり、大盛況でした。あけて11月1日は午前中各支部、国別の紹介展があり、日本は皆が興味を持っていてブースには次々とお客があり、日本の年中行事の多さ、米国からの留学生への配慮は世界でもトップクラスであることがわかり鼻高々でした。



第32回年次総会(於ワシントンDC)報告—続き  
福田 学  
1984 American U.

大野事務局長と Alumni Meetings のChairとして日本から参加させていただきました。今後論点整理を行う必要もあると思いますが、感想も交えて、今後の東京フルブライト・アソシエーション並びに日本で活動されている他のアソシエーションの方々の活動の更なる活性化につながるような点に出来るだけ絞って報告したいと思います。まず、総会の日程ですが、木曜日の夕方から、金曜日と土曜日は終日、日曜日の午前中までと延べほぼ3日に及びテーマに従った講演また、ウズベキスタンの民族ダンス音楽と画像による環境保護のプレゼンなどバラエティに富んだものでした。総会の全体の総括のようなものはありませんでしたが、世界経済の困難な状況については、実質の総会のテーマの締めくりである昼食会の席上においてKrishna Guha氏の講演の後、Q&Aに入ってから経済界特に金融界については今まで金儲けをして困ったときにだけ政府を頼っているのかなり辛らつなコメントなども出ました。Guha氏はこれに対し取り締まるだけではうまく行かないとの発言をしていました。参加者が15カ国

から集まっていて、経済界以外の色々な分野でご活躍されている総会参加者の構成でもあり、物事は様々な側面から検討しなければいけないと考えさせられました。また、参加者の中心はAcademiaの方々で、日本では様々な制約もあり、米国本国では、奨学金が30以上の分野にわたっていることもあり、あらゆる分野での交流がフルブライトの目的とされていることが痛感されました。

“Round Table Discussion”の場においては合計で40程度のテーマが提供されてありました。この中で“Recruiting New Fulbright Alumni Association Members”に、参加させていただきました。ドイツのアソシエーションのPresidentが議長になり、ドイツ・各国の活動状況についてうかがうことが出来ました。昨年韓国においては同窓生の高齢化が共通の話題になったのとは逆に、ドイツにおいては近年の同窓生の活動が活発であるが、なかなか少し前の年代の参加者の割合が増えないとの悩みを伺いました。毎週のビジネスミーティングには実業界・法曹界などのから25-30名程度で講師を招いたりして勉強会などを行っていること、また、音楽家にはパフォーマンスの場を与えていることなど発表されました。日本におけるゴルフトーナメントの話に対しては、アメリカの留学生も呼んでのThanksgiving Dinnerの集い、フットボールなどのスポーツの観戦を行ったり、映画を観に行ったりしていることが話されました。少し難しい話としては、年会費の徴収においては学生・失業者に対しては割引制度を持っていること、ドイツ(中央)の同窓会より、地方のChapter(連邦制度のように中央・地方の関係にあると思われる)に割引の制度が適用になっていることの説明もありました。いずれも、各国の事情などもあり、そのまま受け入れられないと思いますが、今後の参考になると思われます。

最後に、番外編で、総会の後において今年の総会から継続して“Interconnected”の活動でTask Forceが委員会に昇格したことを受けて、今後アメリカと各国という2カ国間(Bilateral)から、多国間(Multi-lateral)の活動にしていくことの話もしました。現時点においてはまだ委員会の運営規則を策定している段階ですが、議長には日系アメリカ人で日本のシンパである中川氏が就任いたしました。機会のあるごとにこの“Interconnected”についてはご報告させていただきたいと思っております。

# 同窓会メンバーの掲示板

## 「王妃ラクシュミー」のことを知ってください

数根 正巳

1959 U. of Texas

インドは1947年の独立に至るまでの数世紀の間、英国の圧制に苦しんでいました。19世紀中頃、これを打ち破ろうと反乱を起こした人々がいました。セポイの乱ともいわれています。

この時、一軍を率いて英軍に挑み、敵軍を悩ませたのがジャンシー王国の王妃ラクシュミー殿下です。東洋のジャンヌダルクとも言われ、独立運動の象徴としてインドや英国ではよく知られています。この本は王妃の生涯を史実に基づいて歴史小説として描いたものです。

インドは日本にとって、多くの面で重要さを増す国で、一層の相互理解が必要と考えます。その歴史の一面を知っていただければと、翻訳出版に漕ぎ着けました(彩流社刊)。幸い日本図書館協会の選定本にも選ばれ、反響もありました。

著者はコロラド大学名誉教授のジョイス・リーブラ博士です。ライシャワー教授の弟子として日本とインドの近代史を専攻し、フルブライト奨学金により日本にも長いた親日家です。他にもインド国民軍や大隈重信や、アジアの女性史なども研究しています。最近では、江戸時代の末期に蔵元に嫁いで苦難の末、現代に至る発展の基礎を築いた日本女性の生涯を小説として発表しています(The Scent of Sake, 2009, Harper Collins 社刊, 紀伊國屋書店)

私は留学中のテキサス大学で偶々講師をしていた著者と知り合い、以来フルブライター同士ということもあって家族ぐるみの半世紀近いつき合いですが、この本の出版はフルブライト・プログラムが有る縁とも言えます。改めてフルブライト委に感謝する次第です。

フルブライト委員会の図書室や東京アソシエーションにもこの本が置いてあります。又、多くの図書館にもありますので、機会があればお読み下さい。又、インドへ行かれる方は、主人公が奮戦し、多くの史跡を遺るジャンシー、グワリオールなどを訪ねられることをお勧めします。

## Joyce Lebra's Letter to the Fulbright Newsletter.

"The contribution of Senator Fulbright, whose insight and imagination produced the Fulbright exchange program, cannot be exaggerated. The worldwide network of academic exchanges has made and continues to make critical contributions to international, cross-cultural understanding. This is especially significant at the present time.

I am personally grateful to the Fulbright program for support during two years when I did research in Japan for my Ph.D. dissertation, 1955-57. My dissertation was published under the title: Okuma Shigenobu, Statesman of Modern Japan, and was translated into Japanese by Waseda University. This research also acted as a springboard for many years of later research and publication on topics in Japanese history.

In addition the Fulbright program provided support for a year's research in India, 1965-66, during which I researched the Japanese cooperation with the Indian National Army in World War II, published in 1970, under the title: Jungle Alliance, and recently reprinted in Singapore. Subsequently I was supported by the Fulbright program for half a year's research in India through the Indo-U.S. Commission on Education and Culture, in 1980. This research was on "India's Joan of Arc," the Rani of Jhansi, and resulted both in a non-fiction book on the Rani and the novel, Durga's Sword, which was translated into Japanese by Masami Yabune, also a Fulbright grantee."

Joyce Lebra  
www.joycechapmanlebra.com

## 「ザ・パニック 1907年金融恐慌の真相」 ロバート・ブルーナー、ショーン・カー著 雨宮 寛、今井 章子訳 東洋経済新報社刊

今井 章子

2004 Harvard U.

昨年秋のリーマンショック直後から、約100年前に米国で起こった金融危機におけるJPモルガンなどの実業家たちの活躍を徹底的に検証・分析した書籍に取り組み、ようやく今年8月末に刊行されました。本書は、当時のニューヨーク金融界の寵児であ

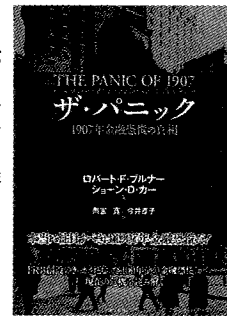


「同窓会メンバーの掲示板」は皆様が自由に使えるスペースです。「NEWSLETTER」は年一回、12月末の発行ですが、本の紹介、イベントのお知らせ、ボランティアの募集、また悲しい訃報など、掲示板をお使いください。(お問い合わせは東京フルブライト・アソシエーションまで)

るチャールズ・パーニーの自死というショッキングな場面から始まります。危機の予兆は前年4月のサンフランシスコ地震にまでさかのぼり、自然災害による保険引き受けが市場を圧迫して、英国中央銀行が米国金融手形の引き受けを禁止、キャッシュが足りなくなった米国金融はその後ドミノ倒しのように取り付け騒ぎへと失速していきます。筆者たちは、当時の新聞、当事者たちの日記や書簡、電報などをくまなく読み込み、中央銀行が存在しない米金融市場で危機がどのように収束されていくかを、学術的検証を交えて描きました。

私が翻訳に初めて取り組んだのは、フルブライトプログラムでハーバード大学ケネディー行政大学院に留学していた2005年の夏。クラスメートの雨宮寛さんから出版の相談を受け、米国生活の締めくくりと今後のスタートとして、ワシントンDCから東京の出版社に売り込みを始めたのでした。これが第1作「あなたのTシャツはどこから来たのか」(ピエトラ・リボリ著。東洋経済新報社刊)となり、翌年の「チャイナフリー：中国製品なしの1年間」を経て「暴走する資本主義」を刊行、著者ロバート・ライシュのパワフルな論旨と2007年危機というタイミングの影響で、売り上げが「暴走」していくのを目の当たりにする経験もできました。

翻訳はクセのある他人の思考を自分の脳に移植しているようなものです。訳文が流れを持って動き出すまでには長い時間と労力が必要ですが、多くの方が私の言葉を通して著者の思考に触れ、疑問や賛同の声を寄せてくださることの醍醐味を知ってしまうと、その魅力から簡単には離れない予感がしています。



## 「ポーツマス会議の人々」(原書房)

ピーター・E・ランドル著  
倉俣・トーマス・旭 佐久間 徹 訳

佐久間 徹

1955 Baylor C of Medicine

日露戦争後、日本とロシアはアメリカ東海岸ポー

ーツマスで講和会議に臨んだ。日本の全権大使は小村寿太郎、ロシアはセルゲイ・ウイッテ。小男の小村と大男のウイッテ、対照的な二人が海軍工廠で交渉の席についたが、日本側の賠償金要求などの点で交渉決裂の危機もあった。ロシア皇帝はウイッテに帰国命令の電報を送ったが、冷静なウイッテはこれを握りつぶし、老練な外交官・小村と密かに二人だけで会い、フランス語で直接交渉をした。その結果、賠償はなし、樺太の南半分割譲で講和は成立した。その間にはセオドア・ルーズベルト大統領の仲介も大きな役割を果たした。

ポーツマス市民はこの平和会議の成立を喜び、のちに小村の故郷・宮崎県日南市とポーツマスは姉妹都市となり、いまでも交流を続けている。2005年は日露講和条約締結から100年目となった。

## 「Bridging the gap between theory and practice in educational research: Methods at the margins」(NY: Palgrave Macmillan)

米原 あき 2002~06 Indiana U.  
(日本学術振興会特別研究員 東京工業大学大学院社会理工学研究科) (Winkle-Wagner, Hunter, Orloff との共著)

本書は、教育学研究を行う上での方法論に焦点を当てて編集された著作である。中でも、我々の社会の中で“the Not-Center”あるいは“the Margins”とされる弱者——人種マイノリティーや開発途上国の人々など——を対象とした教育学研究の可能性を提示している。本書は、理論篇・方法論篇・事例篇の3篇からなる全14章構成となっており、定質(qualitative)・定量(quantitative)両方の方法論についてひろく言及されている。教育学研究を始めるに際して具体的な方法論を学びたい方、社会の様々な場面で“the Margins”とされる人々についての研究動向に興味を持っている方、あるいは、今までとは違った視点で日常生活の「当たり前」を再考してみたいという方が手に取って頂ければ幸甚である。





# 事務局からのお知らせ

大野 熙

1. 例年参加者が10人台の“鎌倉ツアー”に今年は42名が参加。アメリカ人13名全員が「和民」の鍋料理を楽しみ、大いに盛り上がり大成功でした。第1期生（'52年）が3名も来られ、帰国後3年以内のピカピカの若手も3名参加が特筆すべき新しい流れです。
2. 日本から米国に留学する最近のフルブライターは半数が女性です。アメリカでも政界・経済界に男女平等がここ20年ほどでやっと実現してきています。日本はまだ現在の現状で、少子化・高齢化で日本社会全体が閉塞モード、ジリ貧に陥られてきつつあります。女性パワーをうまく活用することは必須条件の一つです。我がフルブライト同窓会もその中で一石を投じたいと願っています。
3. この機関誌、“Newsletter”も、1982年にフルブライト同窓会を設立後、6年目に第1号が創刊され、1枚4ページものから徐々に増ページ化し、16年後2003年から現在の体裁のカラー表紙、('02年ノーベル賞、小柴昌俊氏)になりました。今年の表紙は現在の難しい日米関係の立役者、ルース大使を載せました。巻頭にメッセージがありますが、実に名文であり、我々に対する大いなる期待が寄せられています。
4. 今年の“Newsletter”には、特集として、我が同窓会がどうやって若手を取り込みながら新機軸を打ち出していくかのアンケートを載せています。これから関心、熱意のある皆様と取り組みを推進したいと考えています。
5. 同窓会本部は、山王グランドビル416号室に会員サロンを開設以来、毎週訪問者、利用者がじわじわと増加しつつあります。より多くの皆様の活用をお待ちしております。特に新刊雑誌類はその最大の特色であります。選挙後、民主党は色々いうが、最大のネックは将来の成長見取り図がサッパリ開示されてきていないことにあります。竹中平蔵氏は辛らつ、かつ的を突いた新刊書を2冊出しています。『政権交代バブル』と『「改革」はどこへ行った?』です。サロンではすでに棚上で皆様をお待ちしております。中国の泣き所が目のウロコが落ちるように判る論文掲載の雑誌『Foresight』12月号も必読です。
6. 最後に、フルブライターの分野別統計（フルブライト・ジャパン事務局作成）最新版 下記の表の通り。

フルブライト (GARIOA) 交流計画参加人数 (単位:人)

年 度	日本人	米国人
1949 - 1951*	約 1,000	—
1952 - 1959	2,114	412
1960 - 1969	2,130	424
1970 - 1979	396	238
1980 - 1989	664	418
1990 - 1999	640	508
2000 - 2009	531	515

\* 1949-1951 ガリオア・プログラム

日本のフルブライター (単位:人)

☆ノーベル賞受賞者	5	☆ジャーナリスト	220+
☆ピューリッツァー賞受賞者	2	☆医療関係者 (医師、看護師、薬剤師、等)	740+
☆大使	57	☆学長・総長・学園長	170+
☆大臣	6	☆教授	4,400+
☆国会議員	18	☆音楽家	60+
☆最高裁判事	12	☆芸術家・作家	70+
☆弁護士	120+	☆建築士	100+
☆企業のトップ	450+		

\* 上記は現職に限らず、過去の経験者も含まれております



会員サロンは常にオープン

## アメリカン・ニューグランティー歓迎会



東京フルブライト・アソシエーション  
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2  
山王グランドビル416  
TEL: 03-3503-1841 FAX: 03-3503-0758  
E-mail: fulb@fulbright.or.jp  
http://www.fulbright.or.jp

(HPは、フルブライト・ジャパンのHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。)